

日本人間行動進化学会第8回大会（HBES-J 2015）

大会プログラム ver.2.2（12/1版）

平成27年12月5日（土）～12月6日（日）
総合研究大学院大学葉山キャンパス



目次

大会日程	p.3
口頭発表リスト	p.4
ポスター発表リスト	p.5
ご挨拶	p.7
大会案内	p.7
会場案内	p.12
交通案内	p.14
基調講演要旨	p.20
大会特別セッション「動物とヒトの共生」要旨	p.21
口頭発表要旨	p.22
ポスター発表要旨	p.25
宿泊案内	p.34

大会日程

12月5日(土曜日)

9:30	逗子駅発バス	
9:33	汐入駅発バス	
10:00	受付開始	共通棟 1F 正面玄関
	ポスター貼り付け開始	共通棟 1F 101-102 セミナー室
10:30-10:40	開会挨拶(長谷川眞理子大会委員長)	共通棟 2F 講義室
10:40-11:40	口頭セッション 1	共通棟 2F 講義室
11:40-13:00	昼食	共通棟 1F 103-104 セミナー室・ロビー
	LEBS 編集委員会(12:00-13:00)	
13:00-14:00	基調講演 1 (Hanna Kokko 先生)	共通棟 2F 講義室
14:00-14:20	休憩	共通棟 1F 103-104 セミナー室
14:20-15:20	大会特別セッション「動物とヒトの共生」	共通棟 2F 講義室
15:20-15:40	休憩	共通棟 1F 103-104 セミナー室
15:40-16:40	基調講演 2 (池谷和信先生)	共通棟 2F 講義室
16:40-17:00	移動 & ホテルチェックイン	
17:00-18:30	ポスター発表コアタイム	学融合推進センター 1F 福利厚生室
18:30-21:00	懇親会	学融合推進センター 1F 福利厚生室
逗子駅行バス	19:30, 20:15, 21:22, 21:45 (急行), 22:50 (急行)	
汐入駅行バス	19:01, 20:01, 20:56, 21:53	
23:00	IPC (生産性国際交流センター) 門限	

12月6日(日曜日)

8:09	汐入駅発バス	
8:30	逗子駅発バス	
8:30	受付開始	共通棟 1F 正面玄関
9:20-10:20	口頭セッション 2	共通棟 2F 講義室
10:20-10:40	休憩	共通棟 1F 103-104 セミナー室
10:40-11:40	口頭セッション 3	共通棟 2F 講義室
11:40-13:00	昼食	共通棟 1F 103-104 セミナー室・ロビー
	HBES-J 理事会(12:00-13:00)	
	ポスター撤去終了	共通棟 1F 101-102 セミナー室
13:00-13:30	総会	共通棟 2F 講義室
13:30-14:30	口頭セッション 4	共通棟 2F 講義室
14:30-14:40	学会および大会から諸連絡	共通棟 2F 講義室
14:40-14:50	若手発表賞表彰式	共通棟 2F 講義室
14:50-15:00	閉会挨拶(長谷川寿一会長)	共通棟 2F 講義室
15:30	逗子駅行バス(急行:湘南国際村間門沢調整池発)	
15:41	汐入駅行バス(16:16着)	
15:45	逗子駅行バス(16:02新逗子着、16:14逗子着)	

口頭発表リスト

(♣: 若手奨励賞候補、◇: Twitter 等での言及禁止希望)

12月5日(土曜日)

口頭セッション 1 (10:40-11:40) 座長: 小田 亮 (名古屋工大)	
♣10:40-11:00	O1 『向社会行動は、「今ここ」型意思決定の制約をどう越えるか I ~問題設定と実験の紹介~』 齋藤美松 (東京大学人文社会系研究科)・上島淳史 (東京大学文学部)・谷田林士 (大正大学人間学部)・亀田達也 (東京大学人文社会系研究科)
♣11:00-11:20	O2 “How do the young and old generations of our society cooperate?: An economic experimental approach providing evidence for the overlapping generation mechanism” 深代麻緒 (お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科博士後期課程)・犬飼圭吾 (大阪大学社会経済研究所)
♣11:20-11:40	O3 『知恵の伝承場面における感謝と制御適合』 田淵 恵 (関西学院大学)・三浦麻子 (関西学院大学)
基調講演 1 (13:00-14:00) 座長: 大槻 久 (総研大)	
13:00-14:00	C1 “Towards cancer-aware life history theory” Hanna Kokko (Institute of Evolutionary Biology and Environmental Studies, University of Zurich)
大会特別セッション「動物とヒトの共生」(14:20-15:20) 座長: 橋彌和秀 (九州大)	
14:20-14:50	C3 『東アフリカ牧畜民と家畜の響存』 波佐間逸博 (長崎大多文化社会学部)
14:50-15:20	C4 『ヒトとイヌとの絆形成におけるイヌの視線利用について』 永澤美保 (自治医大医学部)
基調講演 2 (15:40-16:40) 座長: 長谷川真理子 (総研大)	
15:40-16:40	C2 『狩猟採集民と人類の社会進化 世界のフィールドワークから』 池谷和信 (国立民族学博物館民族文化研究部・総合研究大学院大学)

12月6日(日曜日)

口頭セッション 2 (9:20-10:20) 座長: 大坪庸介 (神戸大)	
♣9:20-9:40	O4 『回帰的操作能力の進化と表現生成への転用』 外谷弦太 (北陸先端科学技術大学院大学)・橋本 敬 (北陸先端科学技術大学院大学)
♣9:40-10:00	O5 『合議は集合知を生むか - Choice と Estimation の違いが集団意思決定の精度に及ぼす影響 -』 金 恵璘 (北海道大学大学院文学研究科)・中塚亮太 (東京大学文学部行動文化学科)・亀田達也 (東京大学大学院人文社会系研究科)
♣10:00-10:20	O6 『間接互恵性に基づく集団形成における多段階評価の効果』 宮野修平 (東京大学)・大石晃史 (東京大学)・島田 尚 (東京大学)・伊藤伸泰 (東京大学)
口頭セッション 3 (10:40-11:40) 座長: 井原泰雄 (東京大)	
♣10:40-11:00	O7 “Commitment signals in the context of friendship and romantic relationships” Adam Smith (神戸大学大学院人文学研究科)・山口真奈 (神戸大学大学院人文学研究科)・大坪庸介 (神戸大学大学院人文学研究科)
◇11:00-11:20	O8 『霊長類の発情サインとオス間闘争の共進化モデル』 中橋 涉 (総合研究大学院大学)
♣11:20-11:40	O9 『野生ニホンザル集団における協力行動実験: 集団間の寛容性の違いが協力行動に及ぼす影響』 貝ヶ石 優 (大阪大学大学院人間科学研究科)・中道正之 (大阪大学大学院人間科学研究科)・山田一憲 (大阪大学大学院人間科学研究科)
口頭セッション 4 (13:30-14:30) 座長: 竹澤正哲 (北海道大)	
♣13:30-13:50	O10 『社会的交換と社会的ジレンマの連結に基づく選別的利他行動の進化条件』 稲葉美里 (北海道大学)・高橋伸幸 (北海道大学)
◇13:50-14:10	O11 『集団間葛藤状況下における多数派同調が内集団協力に与える影響の実験的検討』 横田晋大 (総合研究大学院大学)・中西大輔 (広島修道大学)
14:10-14:30	O12 “A Call for Collaboration to Reproduce Significant Findings in Evolutionary Psychology” 平石 界 (慶應義塾大学)・池田功毅 (中京大学 / 日本学術振興会)

ポスター発表リスト

(♣：若手奨励賞候補、◇：Twitter 等での言及禁止希望)

- ♣◇P1 『なぜ5人のきょうだいより1人の他人を選ぶのか?：道徳的ジレンマにおける意思決定への他者からの評価』
小林春菜(名古屋工業大学)・武田美亜(青山学院女子短大)・小田 亮(名古屋工業大学)
- ♣P2 『目の絵は嘘を抑制するか?：社会的文脈を用いた検討』
西井悠登(名古屋工業大学)・平石 界(慶應大学)・小田 亮(名古屋工業大学)
- ♣P3 『集合知の発生条件を探る：共通の反応関数の形成』
黒田起吏(東京大学文学部)・為井智也(奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科)・池田和司(奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科)・小川昭利(順天堂大学医学部)・亀田達也(東京大学大学院人文社会系研究科)
- ♣P4 『オキシトシン受容体遺伝子、バソプレシン受容体遺伝子と向社会的行動の関連』
仁科国之(玉川大学脳科学研究科)・高岸治人(玉川大学)・井上-村山美穂(京都大学)・高橋英彦(京都大学)・山岸俊男(一橋大学)
- ♣P5 『向社会行動は、「今ここ」型意思決定の制約をどう越えるか II～視線パターンと瞳孔サイズの解析～』
上島淳史(東京大学文学部)・齋藤美松(東京大学大学院人文社会系研究科)・谷田林士(大正大学人間学部)・亀田達也(東京大学大学院人文社会系研究科)
- ♣P6 『不確実状況におけるリーダーによる罰の機能』
堀田結孝(国立情報学研究所・JST ERATO 河原林巨大グラフプロジェクト)・竹澤正哲(北海道大学)・山本ひとみ(アサソーディ・ケイ)・加村圭史朗(無所属)・須山巨基(北海道大学・日本学術振興会)
- ♣◇P7 『目の絵と規範の手がかりが寄付に及ぼす影響：フィールド実験による検討』
市橋良太(名古屋工業大学工学部情報工学科)・小田 亮(名古屋工業大学)
- P8 “Commitment to Cooperation and Peer Punishment: its Evolution”
Tatsuya Sasaki (University of Vienna)・Isamu Okada (Soka University)・Satoshi Uchida (RINRI Institute)・Xiaojie Chen (University of Electronic Science and Technology of China (UESTC))
- ♣P9 “An integrated model on the evolution of life history with material and cultural parental contribution on the offspring fitness”
関 元秀(九州大学大学院システム情報科学研究院)・横尾 真(九州大学大学院システム情報科学研究院)
- ♣P10 『二者の相互作用場面における苦痛に対する感受性の収束過程』
村田藍子(北海道大学・日本学術振興会)・亀田達也(東京大学)
- P11 『推論課題における情報優位者の存在と「心の理論」の回答の関係性』
時田真美乃(信州大学)・平石 界(慶應義塾大学)
- ♣P12 『未就学児における他者の協力性に見極めと唾液中オキシトシン濃度との関連』
藤井貴之(玉川大学)・高岸治人(玉川大学)・清成透子(青山学院大学)・岡田浩之(玉川大学)
- P13 『記憶の進化と累積的文化』
中丸麻由子(東京工業大学)
- ♣P14 “An exploratory study of third-party punishment and compensation”
佐々木駿太(神戸大学人文学研究科)・浅井暢子(京都文教大学総合社会学部)・大坪庸介(神戸大学人文学研究科)
- P15 『第三者サンクション行使に対する行動選択肢数の効果』
真島理恵(熊本学園大学)・高橋伸幸(北海道大学)
- P16 『3-4歳児の仲直り行動に影響を与える要因』
大西賢治(東京大学大学院総合文化研究科)
- ♣◇P17 『イヌにおけるヒトの信頼性の評価』
高岡祥子(明治学院大学心理学部)・藤田和生(京都大学大学院文学研究科)
- ♣P18 『Dark Triadは自身のことをどう思っているか?：Dark Triad傾向と印象の自己評定との関連』
喜入 暁(法政大学大学院人文科学研究科)・越智啓太(法政大学文学部)
- ♣P19 “Is there really no such thing as moral outrage?”
小西直喜(神戸大学人文学研究科)・大坪庸介(神戸大学人文学研究科)
- ♣P20 “The Evolutionary Stability of the Intention Signaling Strategy for Indirect Reciprocity”
Hiroki Tanaka (Kobe University, Japan Society for the Promotion of Science)・Hisashi Ohtsuki (The Graduate University for Advanced Studies)・Yohsuke Ohtsubo (Kobe University)
- ♣◇P21 私たちはどのようにして利己的な行動を抑制しているのか? 行動実験から考えられる2つの経路とその神経基盤についての展望
“How do people inhibit selfish behavior? -Two internal ways of inhibition from a behavioral experiment and the future investigation of their neural bases-”
富永仁志(京都大学大学院人間・環境学研究科)・阿部修士(京都大学こころの未来研究センター)・内田由紀子(京都大学こころの未来研究センター)
- ♣P22 『自己の配偶価値がパートナー獲得戦略の選択に及ぼす影響』
山田順子(北海道大学大学院文学研究科)・鬼頭美江(明治学院大学社会学部)・結城雅樹(北海道大学大学院文学研究科)
- ♣P23 『強化学習に基づく共感の計算モデル構築』
齋藤菜月(名古屋大学環境学研究科)・大平英樹(名古屋大学環境学研究科)

ポスター発表リスト

(♣ : 若手奨励賞候補、◇ : Twitter 等での言及禁止希望)

- ◇P24 『ヒビの発情タイミングの重複に関する分析』
井原泰雄 (東京大学)・小田 亮 (名古屋工業大学)・粕谷英一 (九州大学)・松本晶子 (琉球大学)
- ♣P25 『他者痛み観察時の反応における場面と表情の違いの検討』
河村康佑 (千葉大学大学院人文社会科学部)・若林明雄 (千葉大学)
- ◇P26 “Maximization of “Happiness” (= biological fitness and self-enhancement): a mathematical model of fertility decline in humans”
Masahito Morita (SOKENDAI / JSPS, Japan)・Hisashi Ohtsuki (SOKENDAI, Japan)・Hanna Kokko (University of Zurich, Switzerland)・Mariko Hiraiwa-Hasegawa (SOKENDAI, Japan)
- ♣P27 『綺麗な人は他人の顔をよく覚える？ 記憶主体の外見の特性が顔記憶成績に及ぼす影響』
李 楊 (玉川大学)・中嶋智史 (NTT コミュニケーション科学基礎研究所)・松本良恵 (玉川大学)・山岸俊男 (一橋大学)
- ♣◇P28 『学習戦略の環境依存性 ヒヨコは易しい環境条件では習慣依存的に学ぶ』
中村光宏 (総合研究大学院大学先導科学研究科)・川森 愛 (統計数理研究所統計思考院・総合研究大学院大学先導科学研究科)
- ♣P29 『個人の情報精度と集会的決定の一貫性との関係』
関口卓也 (日本学術振興会・総合研究大学院大学)・大槻 久 (総合研究大学院大学)
- ♣P30 『協働行動 相互扶助行動 は利他行動を促進するか？』
井上裕香子 (東京大学大学院総合文化研究科)・熊谷嘉人 (青山学院大学社会情報学部)・清成透子 (青山学院大学社会情報学部)・長谷川寿一 (東京大学大学院総合文化研究科)
- ♣P31 『ウマからヒトへ送られる社会的信号とは？ 異種間コミュニケーションの実験的検証』
リングホーファー萌奈美 (神戸大学大学院国際文化学研究科)・山本真也 (神戸大学大学院国際文化学研究科)
- ♣P32 『協力行動の年齢効果の検討』
松本良恵 (玉川大学)・李 楊 (玉川大学)・山岸俊男 (一橋大学)
- ♣P33 『「イイコト」は協力行動を促進するか？ : ウィンドフォールゲームによる実験的アプローチ』
後藤 晶 (山梨英和大学)
- ♣P34 『小さく損して大きく得する：小ステイクサイズ協力戦略の、シミュレーションを用いた検討』
植村友里 (淑徳大学大学院総合福祉研究科)・神 信人 (淑徳大学総合福祉学部)
- ♣P35 『恋愛における誠意の伝達とコストリー・シグナリング』
石井辰典 (東京成徳大学)
- ♣P36 “Do Facial Expressions Automatically Capture Attention?: Comparison between RT and ERP”
池田功毅 (中京大学・日本学術振興会)・斉藤貴久与 (中京大学)
- ♣◇P37 『実験室ラットの痛み表情認知における情動的な文脈および個体特性の影響：痛み経験、優劣関係および不安傾向に着目した検討』
中嶋智史 (NTT コミュニケーション科学基礎研究所)・請園正敏 (明治学院大学)・高野裕治 (同志社大学)

【ご挨拶】

早いもので日本人間行動進化学会の年次大会も8回目となりました。今年は総研大葉山キャンパスにて2日間の日程で開催致します。葉山キャンパスは三浦半島の中央丘陵に位置し、晴れた日は相模湾から遠くの富士山までも見渡せる風光明媚な場所にあります。最寄りの駅や繁華街からは多少離れた場所にありますが、その分キャンパス内で楽しんで頂けるよう大会に工夫を凝らしました。1日目のポスター発表コアタイムではお飲み物を片手に議論を深めて頂けます。懇親会にも地元の食をご用意致しました。どうぞお楽しみ下さい。

皆様のおかげを持ちまして、本大会は口頭発表12件、ポスター発表37件と盛りだくさんの内容になりました。基調講演2件、大会特別セッションの口頭発表2件も予定されております。また、若手奨励賞にも沢山の応募があり、口頭発表は1/9、ポスター発表に至っては2/30と高い競争率になりました。あらためて人間行動進化学が今まさに発展している学問であり、若手研究者を惹きつける魅力ある分野であることを実感した次第です。

師走のひとつき、葉山で皆さんにお目にかかれることを楽しみにしております。

大会委員長 長谷川真理子
大会実行委員長 大槻 久

【大会案内】

《開催日時・開催場所》

【日時】平成27年12月5日(土)～12月6日(日)

【場所】総合研究大学院大学葉山キャンパス(〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町(湘南国際村))

《会場について》

本大会は、会場を時間帯によって変更する分離開催の形式を採用します。

【12/5(土)10:00-17:00】共通棟1Fおよび2Fで口頭発表・ポスター発表を開催します。

【12/5(土)17:00-21:00】学融合推進センター1F 福利厚生室でポスター発表・懇親会を開催します。

【12/6(日)8:30-15:30】共通棟1Fおよび2Fで口頭発表・ポスター発表を開催します。

指定された時間・場所以外はキャンパスの他の部分には入れませんので、くれぐれもご注意下さい。

《受付》

葉山キャンパス共通棟1F正面玄関にて、12/5(土)は10:00から、12/6(日)は8:30から受付を開始致します。受付では(1)大会参加費、(2)懇親会参加費(参加する方に限る)、(3)昼食代(注文した方に限る)、(4)宿泊・朝食費(予約した方に限る)を一括でお支払い下さい。名札と領収証(項目別)をお渡し致します。なお、名札は懇親会参加や昼食の引き換えの際に提示して頂く必要がありますので、紛失なさないようご注意下さい。

また、当日に大会参加希望および懇親会参加希望をされる方は受付までお申し出下さい。

《大会参加申し込み》

大会参加の事前申し込みは10/26(月)にて終了致しました。大会当日の参加申し込みも受付にて承ります。ただし大会へ参加するためには日本人間行動進化学会の正会員・学生会員・準会員・賛助会員のいずれかである必要があります。日本人間行動進化学会の会員でない方は、受付の隣にある学会ブースにて入会(準会員のみ)の申し込みを済ませてから、参加をお申し込み下さい。大会参加費は以下の通りです。

【一般（正会員、準会員〔一般〕、賛助会員）】 3,000 円
【学生（学生会員、準会員〔学生〕）】 2,000 円

《発表申し込み》

発表申し込みは 11/4（水）にて終了致しました。大会当日の発表申し込みは受け付けません。

《懇親会参加申し込み》

懇親会の事前申し込みは 10/26（月）にて終了致しました。懇親会当日（12/5（土））の参加申し込みも受付にて承ります。ただし懇親会参加の当日申し込み者が多い場合、人数制限のため懇親会への参加をお断りする場合がございます。あらかじめご了承下さい。懇親会参加費は以下の通りです。

【一般事前申し込み（正会員、準会員〔一般〕、賛助会員）】 4,000 円
【学生事前申し込み（学生会員、準会員〔学生〕）】 2,500 円
【一般当日申し込み（正会員、準会員〔一般〕、賛助会員）】 4,500 円
【学生当日申し込み（学生会員、準会員〔学生〕）】 3,000 円

《学会年会費の支払いについて》

2015 年分の学会年会費をまだお納めでない方は、受付の隣にある学会ブースで年会費をお支払い下さい。年会費は正会員 5,000 円、学生会員 3,000 円、準会員 1,000 円です。

《懇親会について》

懇親会は 12/5（土）18 時半から、学融合推進センター棟 1F 福利厚生室において開催致します。

《昼食について》

大会当日に学内の食堂は開いていません。昼食のお弁当（1,000 円）の事前注文をされた方には、お弁当をお渡し致します。12/5（土）・12/6（日）ともに 11:40-13:00 の間、共通棟 1F 103-104 号室でお配りしますので、名札をお持ち下さい。なお、大会直前にお弁当をキャンセルされた場合にも、代金は徴収致します。あらかじめご了承下さい。

周囲には以下の昼食場所がございます。

【ファミリーマート】 会場から徒歩約 7 分（650m）、イートインスペースあり
【湘南国際村センター内レストラン】 会場から徒歩約 2 分（110m）
【中央福祉学院口フォス湘南内レストラン】 会場から徒歩約 3 分（220m）

お弁当をお渡しする共通棟 1F 103-104 号室、および共通棟 1F ロビーでは昼食を召し上がるスペースをご用意しております。お茶等もございますのでどうぞご利用下さい。

なお、メイン会場である共通棟 2F 講義室は 飲食禁止 です。くれぐれも飲食物の持ち込みはなさらぬよう、お願い申し上げます。

葉山キャンパスは燃えるゴミ、燃えないごみ、ペットボトル、缶・びん類の分別収集を行っております。ゴミの分別にご協力下さい。

《宿泊について》

大会ウェブサイトを通じて、会場周辺の宿泊施設の斡旋を行いました。(1) 湘南国際村センター、(2) IPC 生産性国際交流センター、(3) 総研大宿泊施設についてそれぞれチェックインからチェックアウトまでの手順を本プログラム末尾 (p.34-) に記載しましたので、該当の方はよく読んでお間違えのないようご利用下さい。

《プログラム》

大会プログラムは大会ウェブサイト上で pdf にて配布致します。当日の冊子体配布は行いません。

《休憩所》

休憩所は共通棟 1F 103-104 号室です。受付に準ずる形で 12/5 (土) は 10:00 から、12/6 (日) は 8:30 から開いております。コーヒーやお茶などの飲み物、お菓子等を用意しておりますので、ご自由にご利用下さい。ただし、メイン会場である共通棟 2F 講義室は 飲食禁止 です。くれぐれも休憩所からの飲食物の持ち出しはなさらぬよう、お願い申し上げます。

《クローク・託児所》

本大会でクロークや託児所は設置致しません。

《喫煙所》

葉山キャンパスは共通棟の喫煙所 (1ヶ所) を除いて 敷地内全面禁煙 です。ご協力をお願い致します。

《インターネット》

大会期間中 (12/5 (土) 12/6 (日)) は無線 LAN への接続が可能です。大会受付にて ID とパスワードをお渡し致しますので、どうぞご利用下さい。

《LEBS 編集委員会》

LEBS 編集委員会は 12/5 (土) 12:00-13:00 に開催致します。会議参加者には学会から昼食のお弁当をご用意致します (事前に昼食の弁当を注文された方に関しては、ご注文を自動的にキャンセルしておきますので、ご安心下さい)。開催場所は当日にご連絡致します。遅れて来られた方は受付で場所をお尋ね下さい。

《HBES-J 理事会》

HBES-J 理事会は 12/6 (土) 12:00-13:00 に開催致します。会議参加者には学会から昼食のお弁当をご用意致します (事前に昼食の弁当を注文された方に関しては、ご注文を自動的にキャンセルしておきますので、ご安心下さい)。開催場所は当日にご連絡致します。遅れて来られた方は受付で場所をお尋ね下さい。

《基調講演》

本大会では2名の先生をお招きし、いずれも12/5(土)に基調講演をお願いしております。

お一人目のHanna Kokko先生(Institute of Evolutionary Biology and Environmental Studies, University of Zurich)は進化生物学の理論研究者で、性淘汰や生活史戦略に関する数多くの理論研究を発表されています。本大会では“Towards cancer-aware life history theory”という演題で、癌と生活史戦略についてご講演を頂く予定です。

お二人目の池谷和信先生(国立民族学博物館・総合研究大学院大学 民族文化研究部)は長年にわたって世界中の狩猟採集社会に赴きフィールドワークをされてきました。本大会では「狩猟採集民と人類の社会進化 世界のフィールドワークから」という演題で、狩猟採集民と人類の社会進化の関わりについてご講演を頂く予定です。

《大会特別セッション「動物とヒトの共生」》

本大会では12/5(土)14:20-15:20に大会実行委員会と新学術領域『共感性の進化・神経基盤』との共催で、「動物とヒトの共生」と題して大会特別セッションを開催致します。講演者は長崎大学の波佐間逸博先生と自治医科大学の永澤美保先生で、波佐間先生からは「ヒトと牧畜」の共生について、永澤先生からは「ヒトとイヌ」の共生についてそれぞれご発表頂く予定です。

《口頭発表》

口頭発表の持ち時間は19分です(発表15分、質疑応答4分)。発表会場にはノートパソコン(Windows: Windows 7およびPowerPoint 2010インストール済、Mac: OS X 10.9.5およびPowerPoint for Mac 2011インストール済)と液晶プロジェクターを用意しております。発表を円滑に進めるために、なるべく大会で用意したパソコンをご使用の上、休憩時間中にファイルをパソコンに移して動作確認を済ませておくようお願いいたします。

ご自分でパソコンをお持ちになる場合は接続方法にご注意下さい。会場はVGA接続のみ対応しています。HDMIは対応していません。Macの方はアダプタを忘れずにお持ち下さい。

発表時にはベルで経過時間をお知らせ致します。本大会は帰りの交通機関との接続を必要とされる参加者が多数いらっしゃいます。時間厳守をお願い致します。また、座長の方は19分経過後はすみやかに次の講演者の紹介にお進み下さい。

【1鈴】12分

【2鈴】15分(発表終了)

【3鈴】19分(質疑応答終了)

《ポスター発表》

ポスターパネル(スチール製)の内径は881 × 1444mmで、A0用紙のサイズに対応しています。マグネット等はこちらで用意致します。

ポスターの掲示は12/5(土)10:00-15:40の間は共通棟1F 101-102セミナー室において可能です。その後スタッフがポスターが掲示されている状態でポスターボードを移動させ、12/5(土)の17:00-18:30には学融合推進センター1Fでポスター発表のコアタイムを行います。この場所で17:00からポスターを掲示し始めても構いません。

12/6(日)は再び8:30-13:00の間に共通棟1F 101-102セミナー室においてポスター掲示が可能です。ポスターは昼食が終了する13:00までに撤去を完了させて下さい。この時間までに撤去されていないポスターは、大会委員会の判断で処分することがございますのでご了承下さい。

《Twitter等での言及について》

口頭発表・ポスター発表の中には、研究が現在進行中等の理由で、発表内容を積極的には外部に公開されたくない方がいらっしゃいます。発表登録の際に「Twitter等での言及を希望しない」にチェックを入れた方の発表は、プログラム中◇マークで表示されていますので、ご配慮頂き、内容についてTwitter等での言及はおやめ下さい。

《若手奨励賞》

第1著者として発表する学生もしくは学位取得5年以内の方で、発表申込時に奨励賞対象に該当すると申告された方を審査対象として、若手奨励賞を設けます。口頭発表部門1件、ポスター発表部門2件の合計3件について、優れた発表を表彰致します。審査対象の発表はプログラム中♣マークで表示されています。

審査基準は「研究テーマ・方法の独自性」、「研究結果の新規性」、「研究結果の発展可能性」、「発表の分かりやすさ」の4点です。12月6日(日)の閉会時(14:40-)に受賞者の発表と表彰式を行います。

審査委員は以下の各氏です(敬称略・あいうえお順)。

【審査委員長】 長谷川真理子(総研大)

【口頭発表審査委員】 亀田達也(東京大)・長谷川寿一(東京大)・明和政子(京都大)

【ポスター発表審査委員】大槻 久(総研大)・大坪庸介(神戸大)・小田 亮(名古屋工大)・

亀田達也(東京大)・高橋伸幸(北海道大)・竹澤正哲(北海道大)・

橋本 敬(北陸先端科学技術大)・長谷川寿一(東京大)・平石 界(慶應義塾大)・

明和政子(京都大)・山岸俊男(一橋大)

《若手旅費支援》

日本人間行動進化学会では、常勤の職に就いていない発表者の一部に1万円の旅費援助を実施します。以下の3条件を満たし10/26(月)までにwebから参加登録を済ませた方のうち、旅費支援を希望した方を選考対象とし、発表要旨に基づいて選考委員会が支援対象者を決定します。

(1) 第8回大会で第1著者として研究発表をすること。

(2) 研究発表時に常勤の職に就いていないこと。

(3) 1万円以上の旅費および宿泊を必要とする遠隔地からの参加であること。

《大会委員会》

【大会委員長】 長谷川真理子(総研大)

【大会実行委員長】大槻 久(総研大)

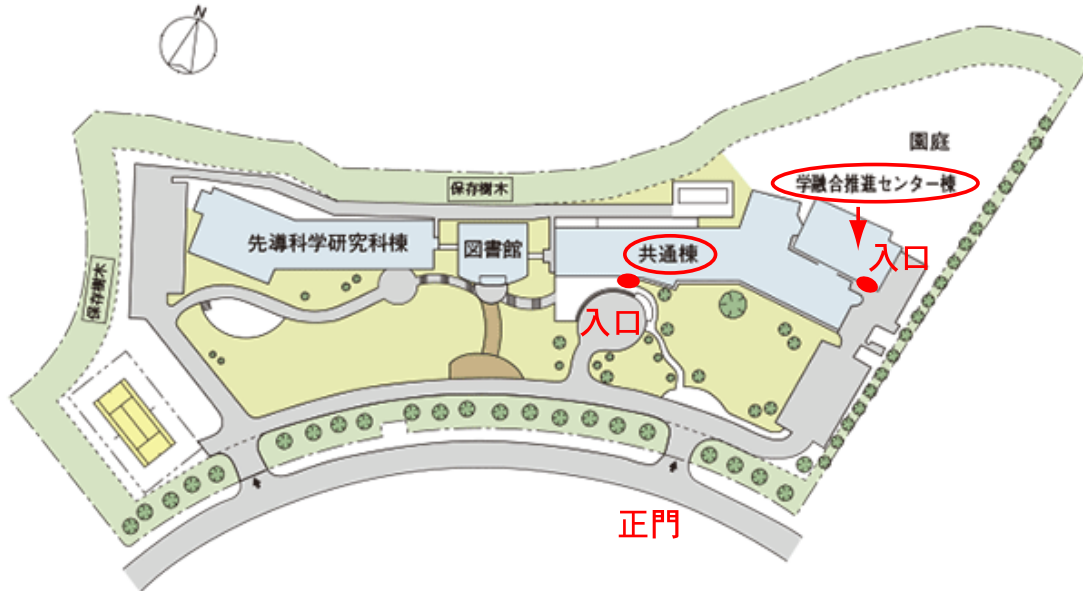
【大会実行委員】 中橋 涉(総研大)・森田理仁(総研大)・森本裕子(総研大)・横田晋大(総研大)

【特別協力者】 稲田晶子(総研大)・小瀧弘子(総研大)

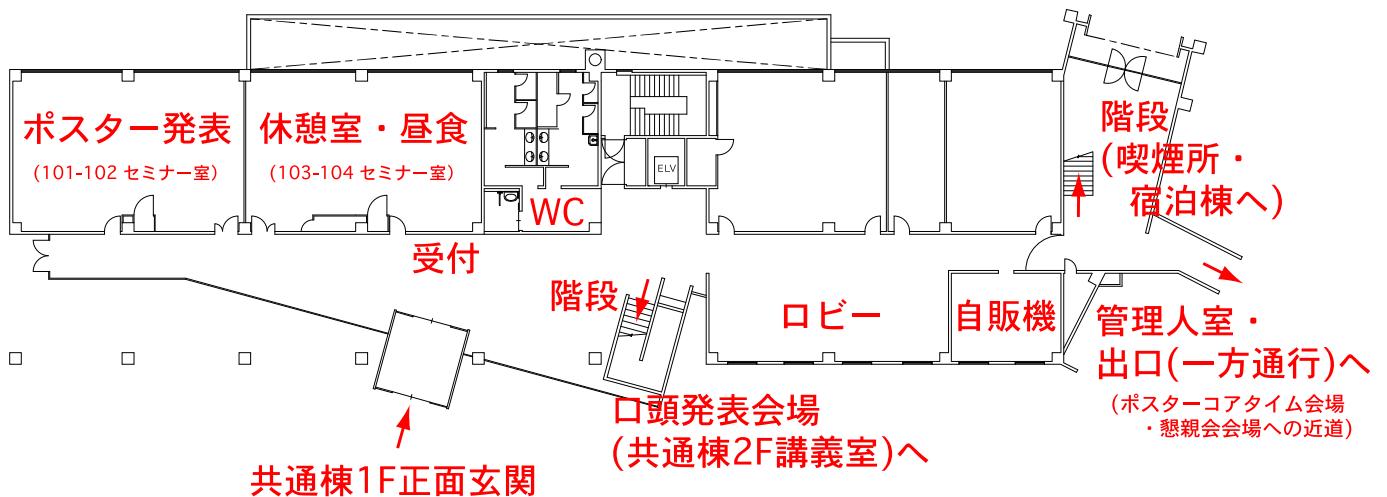
【会場案内】

総合研究大学院大学正門を入れて正面に見える建物が、本大会の会場の一つとなります「共通棟」です。共通棟正面玄関は1日目は10:00-17:00の間、2日目は8:30-大会終了の間開けておりますが、その他の時間帯の出入りはできません。

12/5(土)17:00-18:30に開かれるポスター発表コアタイム、ならびに18:30-21:00に開かれる懇親会の会場は、正門を入れて右側の道を進み、職員用駐車場を過ぎた先に見える建物「学融合推進センター棟」の1F福利厚生室で開催致します(写真1)。学融合推進センター棟の玄関は16:40-懇親会終了まで開けておりますが、その他の時間帯の出入りはできません。



共通棟1F地図



なお、上図右端の矢印方向に廊下を進むと共通棟の出口があり、学融合推進センター棟(ポスター発表コアタイム会場ならびに懇親会会場)の目の前に出ることができたいへん便利です(写真1)。廊下の突き当たりにある出口はオートロック式ですので、中から外に出る際は出口の左横の壁にある緑色のボタンを押して解錠して下さい。

ただしこの出口は一方通行です。一度共通棟から出ますと、IDカードを持つ総研大宿泊者以外は戻って来られませんのでくれぐれもご注意ください。



写真 1: 左の建物が共通棟東端（宿泊施設入口）、右の建物がポスター発表コアタイム会場ならびに懇親会会場である学融合推進センター棟

【交通案内】

総合研究大学院大学葉山キャンパス、宿泊施設の 湘南国際村センター および IPC 生産性国際交流センター の最寄りのバス停は「湘南国際村センター前」もしくは「湘南国際村間門沢調整池（逗子駅からの急行バスに限る）」です。

「湘南国際村センター前」バス停からキャンパスへは、バスで来た道を戻って、歩いて約2分です。

「湘南国際村間門沢調整池」バス停からキャンパスへは、ファミリーマートの角から坂道を登って歩いて約9分です。

また逗子駅、新逗子駅方面より タクシー でお越しの場合、料金は約3,000円、所要約20分です。以下のタクシー会社等が便利です。

【京急葉山交通】0120-71-2858

【菊池タクシー】0120-21-1775、046-875-0079



《関東近郊から電車でお越しの方へ》

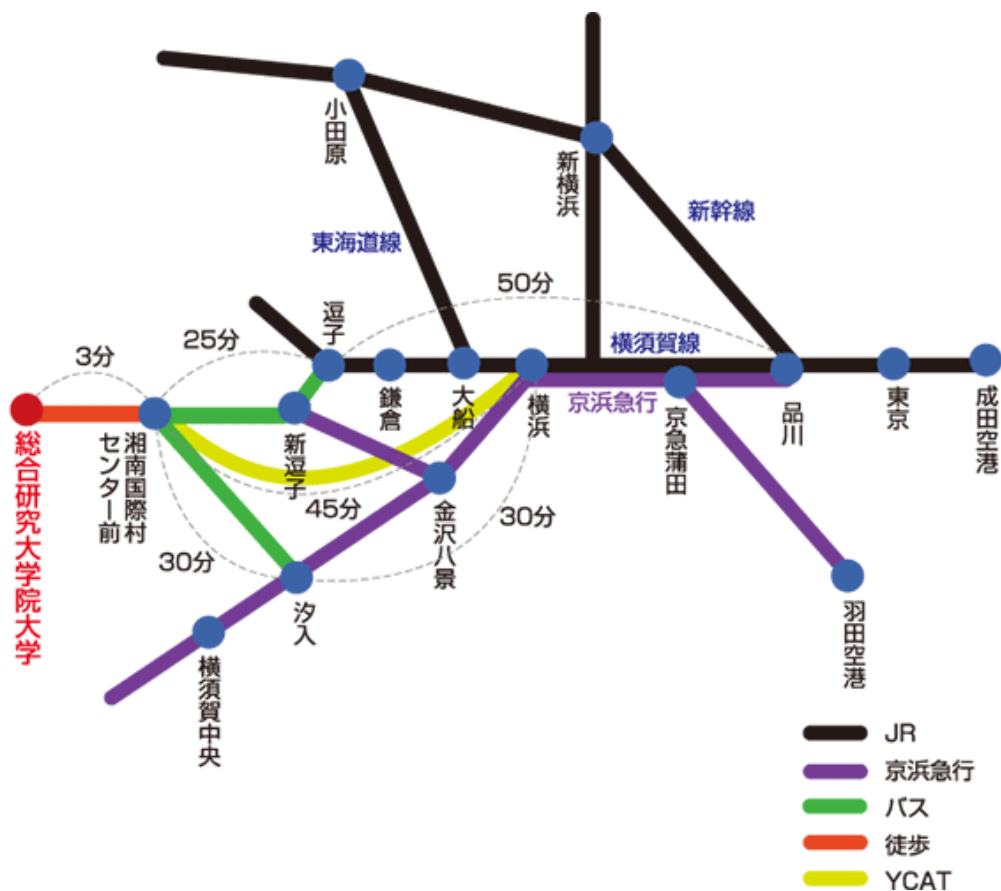
葉山キャンパスの最寄り駅は、JR 逗子駅、京急新逗子駅および京急汐入駅です。いずれも横浜からは電車で約 30 分、品川からは電車で約 50 分の位置にあります。

JR 逗子駅には横須賀線と、湘南新宿ラインの一部が乗り入れています。降りましたら東口を出て下さい。左側前方にバスターミナルがあります。

京急新逗子駅は京急線のエアポート急行と、特急・普通列車の一部が乗り入れています。品川・横浜方面からお越しの方で、京急新逗子駅をご利用の方は、途中金沢文庫駅もしくは金沢八景駅で乗り換えが必要な場合があります。降りましたら南口を出て下さい。セブン・イレブンの方向に歩くとバス停（新逗子駅）があります。

京急汐入駅は京急線の特急と普通列車が停車します。改札を出ましたら右手に進んで下さい。バスターミナルがあります。

また、横浜駅東口 YCAT（横浜シティエアターミナル）からは、土休日の朝 8:55 と 10:30 に湘南国際村センター前直通の高速バスが出ており便利です。所要時間は約 42 分です。

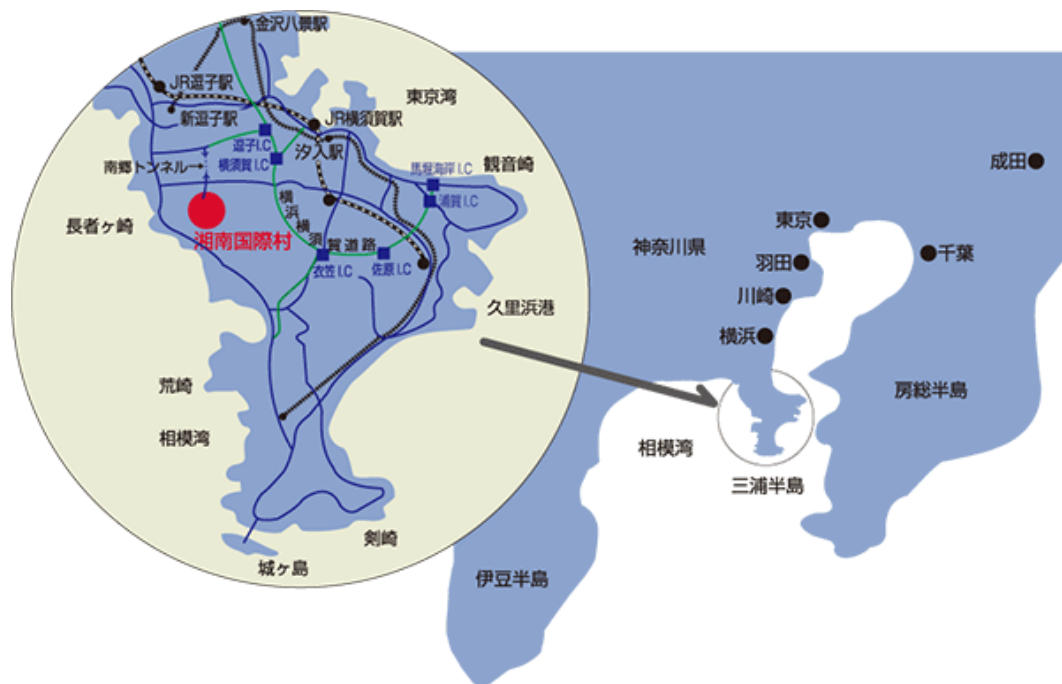


《新幹線でお越しの方へ》

葉山キャンパスの新幹線最寄り駅は、新横浜駅もしくは品川駅です。

新横浜駅からは横浜線で東神奈川駅まで（もしくは直通電車で横浜駅まで）出た後、東神奈川駅から京浜東北線で横浜駅まで出て、横浜駅から JR 横須賀線（および湘南新宿ラインの一部）を使って JR 逗子駅まで、もしくは京急線を使って京急汐入駅もしくは京急新逗子駅までおいでになるのが便利です。

品川駅からは JR 横須賀線を使って JR 逗子駅まで、もしくは京急線を使って京急汐入駅もしくは京急新逗子駅までおいでになるのが便利です。



《飛行機でお越しの方へ》

羽田空港からは、京急線のエアポート急行、新逗子駅行にご乗車になると、所要時間約 70 分で乗り換えなしで京急新逗子駅に着くことができ、たいへん便利です。

《お車でお越しの方へ》

横浜横須賀道路の逗子 IC を降りて逗葉新道（有料道路：100 円）にお入り下さい。逗葉新道を降りてすぐの交差点を左折すると、南郷トンネルという長いトンネルに入ります。南郷トンネルを出た直後の「湘南国際村入り口」交差点を直進し坂道を登り、左手にファミリーマートがある「湘南国際村センター入り口」交差点を左折します。坂を 1 分ほど登ると左手に総合研究大学院大学キャンパスが見えます。駐車場のスペースは広いので、予約や手続き無しにご利用になれます。

IPC 生産性国際交流センターや湘南国際村センターの駐車場は、総合研究大学院大学キャンパスを過ぎてすぐの右手にあります。

《バス時刻表（土休日：キャンパスへの往路）》

逗 16・26 系統「湘南国際村センター前行」 終点からキャンパスまで徒歩約 2 分

逗子駅（1 番乗り場）発	以前略	8:30	9:30	10:30	11:30	12:55	13:55	14:55	15:55	16:55
新逗子駅（1 番乗り場）発	以前略	8:32	9:32	10:32	11:32	12:57	13:57	14:57	15:57	16:57
湘南国際村センター前着	所要約 30 分									
		17:55	18:50	19:40	20:49 終					
		17:57	18:52	19:42	20:51 終					
		所要約 30 分								

急行・直行「湘南佐島なぎさの丘行」 必ず「湘南国際村間門沢調整池」で下車！ キャンパスまで徒歩約 9 分

逗子駅（2 番乗り場）発	以前略	9:05	10:30	12:40	14:00	16:00	17:25	21:00	22:10 終
新逗子駅（1 番乗り場）発	以前略	9:07	10:32	12:42	14:02	16:02	17:27	21:02	22:12 終
湘南国際村間門沢調整池着	所要約 15 分								

汐 16 系統「湘南国際村センター前行」 終点からキャンパスまで徒歩約 2 分

汐入駅（2 番乗り場）発	以前略	8:09	9:33	11:07	12:47	13:48	14:47	15:47	16:50	18:05
湘南国際村センター前着	所要約 35 分									
		19:14	20:05	21:06 終						
		所要約 35 分								

横浜駅発高速バス「湘南佐島なぎさの丘行」 終点からキャンパスまで徒歩約 2 分

横浜駅東口 YCAT（5 番乗り場）発	8:55	10:30
湘南国際村センター前着	9:37	11:12

《バス時刻表（土休日：キャンパスからの帰路）》

逗 16・26 系統「逗子駅行」

湘南国際村センター前発	6:54 始	7:25	8:15	9:15	10:15	11:15	12:15	13:45	14:45	15:45
新逗子駅着	所要約 23 分									
逗子駅着	所要約 30 分									
	16:45	17:45	18:31	19:30	20:15	21:22 終				
	所要約 23 分									
	所要約 30 分									

急行・直行「逗子駅行」 必ず「湘南国際村間門沢調整池」から乗車！

湘南国際村間門沢調整池発	6:50 始	8:10	10:00	11:20	13:30	15:30	16:50	18:15	21:45	22:50 終
新逗子駅着	所要約 15 分									
逗子駅着	所要約 22 分（横須賀線最終品川行 23:35 逗子発）									

汐 16 系統「汐入駅行」

湘南国際村センター前発	7:05 始	7:26	9:01	10:26	12:01	13:41	14:41	15:41	16:41	17:45
汐入駅着	所要約 35 分									
	19:01	20:01	20:56	21:53 終						
	所要約 35 分									

高速バス「横浜駅東口 YCAT 行」

湘南国際村センター前発	16:43	18:13
横浜駅東口 YCAT 着	17:28	18:58

《バス時刻表（平日：キャンパスへの往路）》

逗 16・26 系統「湘南国際村センター前行」 終点からキャンパスまで徒歩約 2 分

逗子駅（1 番乗り場）発	以前略	14:40	15:40	16:40	17:05	17:50	18:35	19:00	19:30	20:20
新逗子駅（1 番乗り場）発	以前略	14:42	15:42	16:42	17:07	17:52	18:37	19:02	19:32	20:22
湘南国際村センター前着	所要約 30 分									
	20:45	21:10	21:41	22:17	22:50 終					
	20:47	21:12	21:43	22:19	22:52 終					
	所要約 30 分									

急行・直行「湘南佐島なぎさの丘行」 必ず「湘南国際村間門沢調整池」で下車！ キャンパスまで徒歩約 9 分

逗子駅（2 番乗り場）発	以前略	15:00	16:20	18:00	18:20	19:15	20:10	20:30	21:35	
新逗子駅（1 番乗り場）発	以前略	15:02	16:22	18:02	18:22	19:17	20:12	20:32	21:37	
湘南国際村間門沢調整池着	所要約 15 分									
	22:10	22:50 終								
	22:12	22:52 終								
	所要約 15 分									

汐 16 系統「湘南国際村センター前行」 終点からキャンパスまで徒歩約 2 分

汐入駅（2 番乗り場）発	以前略	14:47	15:50	16:49	18:08	19:19	20:09	21:12 終
湘南国際村センター前着	所要約 35 分							

基調講演要旨

C1 “Towards cancer-aware life history theory”

Hanna Kokko (Institute of Evolutionary Biology and Environmental Studies, University of Zurich)

Evolutionary biologists and cancer biologists do not often overlap with their conferences or journals, even though it is becoming recognized that cancer cells are subject to natural selection, and that organisms have evolved tumour suppression mechanisms. The limited overlap might reflect a view that cancer only becomes a significant problem when organisms are freed from other sources of mortality (in humans, cancer incidence rises sharply at old ages). The flipside of this argument is, however, that the age-dependent pattern of cancer arises rather naturally from cancer defences that fail over time in a stochastic manner; the efficiency of these defences can thus be subject to natural selection, and should be incorporated in life-history theory. I will discuss some simple models and consequences, including the possibility of cancer risk as an outcome of sexual conflict in sexually dimorphic populations.

C2 『狩猟採集民と人類の社会進化 世界のフィールドワークから』

池谷和信 (国立民族学博物館民族文化研究部・総合研究大学院大学)

私は、これまで人類の生活様式のなかで狩猟採集社会に関心を持ち、主として生態人類学の視点から彼らと自然とのかかわりあいを把握してきた。対象地域は、ホモ・サピエンスの誕生したアフリカに焦点を当てながらも、アフリカ大陸以外への人類の移動にともないユーラシアの熱帯、温帯、寒帯、そしてアメリカ大陸などである。人類は、多様な環境のなかでどのように技術や社会などを展開してきたのであろうか。現時点においても、「誰が、狩猟採集民であったのか?」「狩猟採集民の共通する文化とは何か?」など、十分に明らかにされていない課題は多い。

その一方で、狩猟採集民を対象にした生態人類学的研究は、過去 50 年の間、大きな展開を余儀なくされた。1960 年代には、アフリカの狩猟採集民サン (ブッシュマン) やハツツアなどが典型的な研究対象としてされ、民族誌資料から人類の初期的姿を把握するための一般モデルが構築された (「伝統主義」)。1980 年前後からは、このような「伝統主義」の見方が批判されて、過去と現在の社会とは容易に結び付けることは難しいとみなす「修正主義」の見方が支持され、両者のあいだに論争が生じてきた。現在でもこの論争は解決されたわけではないが、両者を統合するような議論が生まれている。それは、過去数千年や数万年の長期的時間のなかで狩猟採集民の存在を位置付ける立場である。

私は、このような研究動向をふまえて、狩猟採集民からみた地球環境史という枠組みから研究を続けてきた。ここでは、アフリカ、アジア、アメリカでの狩猟採集社会でのフィールドワークを通して、狩猟採集民と人類の社会進化とのかかわりについて論議をすることを目的とする。とりわけ、人類にとっての「ものの獲得」と「ものの分配」に焦点を当てて把握する。

大会特別セッション「動物とヒトの共生」要旨

C3 『東アフリカ牧畜民と家畜の響存』

波佐間逸博（長崎大多文化社会学部）

わたしはこれまで、東アフリカ・ウガンダ共和国の乾燥サバンナ帯に居住するカリモジョンとドドスの人びとの社会で生態人類学的な住み込み調査をおこない、日帰り放牧や搾乳が人間と家畜のどのような相互行為のうえに成り立っているかを研究してきた。この調査をつうじて、東アフリカでは、主流なドメスティケーション研究が保持してきた動物 人間関係観とは異なり、有蹄類自身のコミュニケーションなセンスが牧畜生活を営むうえで重要な役割を果たしていることがわかってきた。つまり、家畜は分類・認識の主体にとっての他と差異をかかえた個（そしてその差異をもとに意味を付与された個）であるばかりでなく、人間を細やかに認知し、擬獣化する他者でもあり、そのような家畜の力を介した〈響きあい〉のうえに牧畜生活が成立しているということが明らかになってきたのである。発表ではまず、群れの家畜化、牧童の声へのウシ・ヤギの応答、牛の個体記憶に注目して、動物と人が相互性を生成する「個」として直接的に結びついているあり方を示す。そして、家畜強奪（レイディング）と武装解除介入における共同体の成員／「友」といった対他関係の構成に注目し、自然に強く依存した人間の社会において、自然的他者とのかわりか、対人関係の世界の構成とどのように関連するかについても検討する。

C4 『ヒトとイヌとの絆形成におけるイヌの視線利用について』

永澤美保（自治医大医学部）

イヌはヒトとのコミュニケーション場面において、自身の視線を巧みに利用していることが示唆されている。このようなヒトに類似したコミュニケーションスキルはオオカミよりもイヌのほうが優れており、家畜化の過程で獲得されたものとされている。今回の研究では、イヌからヒトへの視線がアタッチメント行動としてヒトとイヌとの関係構築に作用しているかどうかについて調べた。その結果、両者の間にはオキシトシン神経系を介したポジティブ・ループが成立すること、ポジティブ・ループの形成にイヌからの視線が重要な役割を果たしていることが明らかとなった。また、オオカミとの比較から、このような絆の形成も家畜化によって成立するようになったことが示唆された。

口頭発表要旨

(♣ : 若手奨励賞候補、◇ : Twitter 等での言及禁止希望)

- ♣O1 『向社会行動は、「今ここ」型意思決定の制約をどう越えるか I ~問題設定と実験の紹介~』
齋藤美松 (東京大学人文社会系研究科)・上島淳史 (東京大学文学部)・谷田林士 (大正大学人間学部)・亀田達也 (東京大学人文社会系研究科)
- 近隣他者と協力関係を築くために進化したと考えられる向社会行動は、自動的な処理に基づく主張されている (Rand et al., 2012)。しかし「今ここ」を越えた問題 (ex. 遠隔地の貧困) に対処するには自動的な処理では限界があり、なすべき行動を社会正義から考えるという他者視点の取得を含む熟慮的な処理が重要だと考えられる。本研究では、参加者にユニセフが実施中のアフリカ募金とシリア募金に関する個人的な意思決定及び、これまでに他の参加者がアフリカとシリア各々にどれだけ募金したかの社会情報を与えた上で意思決定を行なってもらい、その際の眼球運動を測定して認知処理過程を調べた。その結果、募金に応じる参加者ほど意思決定までの反応時間が長く、「今ここ」を越えた他者への向社会行動について熟慮的な処理の役割が示唆された。また、募金先の写真イメージを多く注視し、情動喚起を反映するとされる瞳孔径の拡張率が大きい参加者ほど募金先間の極めて局所的な格差に影響されやすいことが分かった。この結果は、情動に基づく自動的な処理では「今ここを越えた不遇」に適切に対処できない可能性を示唆する。
- ♣O2 “How do the young and old generations of our society cooperate?: An economic experimental approach providing evidence for the overlapping generation mechanism”
深代麻緒 (お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科博士後期課程)・犬飼圭吾 (大阪大学社会経済研究所)
- How and why the social mechanism makes us cooperate with each other? Recently, some economists have used game theory to provide a theoretical understanding of the mechanisms at play. For instance using the overlapping generation game, it has been shown that rewards and penalties are given in the past and those perceived to occur in the future has a large influence on the players' willingness to cooperate. However persuasive as these mathematical arguments are, whether such equilibrium exists in the real world requires empirical observation. Therefore, our objective is to provide evidence for the theory that the overlapping mechanism influences cooperative behavior by using the overlapping generation game in economic experiments. Our results show that an overlapping generation can lead to people cooperating under experimental conditions, something that is consistent with the original game theory. However, our results are in contradiction to the prediction made by the theory relating to strategies taken to achieve cooperation.
- ♣O3 『知恵の伝承場面における感謝と制御適合』
田淵 恵 (関西学院大学)・三浦麻子 (関西学院大学)
- 本研究の目的は、高齢者が若者に対して、自分の知識や知恵を伝承し人生のアドバイスをするという利他的行動場面において、若者が相手に感謝する相互作用の方法を、制御焦点理論を用いて明らかにすることであった。実験参加者 (大学生 94 名) は、同じ大学の OB がこれまでの経験と知恵や人生の教訓について記した「アドバイステター」を読み、書き手に対する感謝を評価した。実験デザインは、レターの書き手の世代 (若者・中年・高齢) × レターの内容 (促進・予防) × レターの読み手の制御焦点傾向 (促進焦点・予防焦点) の 3 要因 12 水準で、いずれも被験者間要因とした。その結果、実験参加者である若者は、同世代からアドバイスを受ける場合はアドバイスの方略が自身の制御焦点の志向性と合致しているほうが相手に感謝を抱きやすい一方で、高齢者からアドバイスを受ける場合は合致していないほうが相手に感謝を抱きやすいことが明らかとなった。
- ♣O4 『回帰的操作能力の進化と表現生成への転用』
外谷弦太 (北陸先端科学技術大学院大学)・橋本 敬 (北陸先端科学技術大学院大学)
- ヒトの言語コミュニケーションには、既知の表現を回帰的に組み合わせる新たな表現を作るという特徴が見られる。このようなコミュニケーションはなぜヒト以外の社会性動物に見られないのだろうか。この問題に対して理論言語学からは、人類の道具製作において典型的に観察される回帰的な組み合わせ操作が表現生成の能力に転用されたため、という仮説が提示されている。この仮説と、行動連鎖を作り出す計画の能力が言語表現の生成においても働くという神経科学の知見から、行動の計画と表現生成に必要な短期記憶能力を備えたエージェントをスタック付きオートマトンでモデル化することができる。本発表では、情報伝達のみが生存価となる環境と、情報伝達に加えて多様な行動や複雑な行動が生存価となる環境とでエージェントの進化プロセスにどのような違いが生じるのかについて報告する。

口頭発表要旨

(♣：若手奨励賞候補、◇：Twitter等での言及禁止希望)

- ♣O5 『合議は集合知を生むか - Choice と Estimation の違いが集団意思決定の精度に及ぼす影響 - 』
金 恵瑛 (北海道大学大学院文学研究科)・中塚亮太 (東京大学文学部行動文化学科)・亀田達也 (東京大学大学院人文社会系研究科)
- ヒトを含む動物が不確実な環境で直面する適応課題は、複数の選択肢から最適なものを選ぶ「選択」課題と、対象の大きさや量を判断する「推定」課題に大きく分けられる。本研究では、「合意が求められる集団場面において課題の種類によって集合知の発生に違いが見られるか」という問いを行動実験により検討した。実験では、2つの瓶のうちどちらにより多くのビー玉が入っているのかを判断する【選択条件】と、2つの瓶の中に入っているビー玉の個数をそれぞれ判断する【推定条件】とに参加者を分け、5人1グループで議論による集団意思決定を行わせた。この際、議論を行う前に一旦個人判断を行ってもらい、判断のベンチマークとした。実験の結果から、選択条件と比べて推定条件では、集団のパフォーマンスが個人判断より大きく低下することが明らかになった。このことは、選択か推定かという課題の種類によって、対面的相互作用での社会的な影響プロセスが異なる可能性と、集合知の発生条件を検討する上で選択と推定を明確に区別することの重要性を示唆している。
- ♣O6 『間接互惠性に基づく集団形成における多段階評価の効果』
宮野修平 (東京大学)・大石晃史 (東京大学)・島田 尚 (東京大学)・伊藤伸泰 (東京大学)
- 間接互惠性は協利行動を維持する重要な機構であると同時に、社会が複数の排他的な集団に分裂するのを促進する側面も指摘されている。しかし、既存モデルでは、多数の安定な集団の形成や集団間の分裂統合などを実現できる進化的に安定な戦略は発見されていない。今回は、他者の評価を4段階まで許すモデルに拡張し、上記のような複雑な集団形成を説明でき、かつ進化的にも安定な戦略を探索した結果を報告する。
- ♣O7 “Commitment signals in the context of friendship and romantic relationships”
Adam Smith (神戸大学大学院人文学研究科)・山口真奈 (神戸大学大学院人文学研究科)・大坪庸介 (神戸大学大学院人文学研究科)
- Effectively communicating commitment to a relationship partner is a quintessential human problem. Here, we examine the function of commitment signals in friendship and romantic relationships. In an open-ended pilot study, we first determined the common methods by which friends and romantic partners signal commitment to each other. In a within-participant vignette study using a Japanese undergraduate sample (Study 1), we confirmed that costly, versus non-costly, commitment signals are more effective at signaling dedication to both friends and romantic partners. We also confirmed that the absence of situationally appropriate commitment signals (e.g., failure to remember a special occasion) is detrimental to relationship functioning, and that such failures produce substantially greater harm to romantic relationships than to friendships. Using a between-participants American non-student sample, Study 2 replicated the results of Study 1, providing initial evidence for the universal function of human commitment signals. Evolutionary implications of these findings will be discussed.
- ◇O8 『霊長類の発情サインとオス間闘争の共進化モデル』
中橋 渉 (総合研究大学院大学)
- 女性が排卵の明確なサインを示さないのはヒトの大きな特徴である。これは排卵隠蔽と呼ばれ、ペア型の配偶形態や男性による子の世話などのヒトの重要な特性の進化とも深く関連していると言われる。一方で霊長類の排卵（発情）のサインは多様であり、かすかなサインが祖先型で依然そのようなサインを示す種もいるが、性皮を腫脹させ派手に妊性をアピールする種もいれば、ヒトと同様に明確なサインを示さない種もいる。ボノボのメスは実際には妊娠不能なのに性皮を腫脹させる期間を持ち（偽発情）これによってオス間闘争の弱い平和なボノボ社会が実現していると考えられている。このような多様な発情サインがなぜ霊長類で進化したのか、そしてそれが霊長類社会にどのような影響を与えているのかを理解することは人間行動の進化を考える上でも重要である。そこで、メスの発情サインとオス間闘争の強さの共進化を考える数理モデルを作り、この問題を研究した。
- ♣O9 『野生ニホンザル集団における協利行動実験：集団間の寛容性の違いが協利行動に及ぼす影響』
貝ヶ石 優 (大阪大学大学院人間科学研究科)・中道正之 (大阪大学大学院人間科学研究科)・山田一憲 (大阪大学大学院人間科学研究科)
- 動物の協利行動を調べる実験課題では、2個体が同時に行動することで報酬を得られる場面を設定する。先行研究から動物の協利行動には食物に関する寛容性の高さが大きく影響し、寛容性の高いペアや動物種では協利行動課題が成功しやすいことが知られている。本研究では集団内の個体間の寛容性に地域差の存在する野生ニホンザル集団に着目し、寛容性の高い淡路島集団と寛容性の低い勝山集団において協利行動課題を実施することで、社会全体の寛容性の違いが協利行動に影響を及ぼすかを検証した。本研究では2頭のサルが1本のヒモの両端を同時に引くことで報酬を引き寄せる課題を用いた。実験の結果、高い寛容性を示す淡路島集団では59%の試行で課題が成功したのに対し、個体間の寛容性が低い勝山集団では実験が成功したのは1%の試行においてのみであった。これらの結果から、個体間の寛容性の高い社会では協利行動が起こりやすくなると考えられる。

口頭発表要旨

(♣：若手奨励賞候補、◇：Twitter 等での言及禁止希望)

♣O10 『社会的交換と社会的ジレンマの連結に基づく選別的利他行動の進化条件』

稲葉美里（北海道大学）・高橋伸幸（北海道大学）

協力者には協力し、非協力者には協力しない選別的利他行動は、個人対個人の協力を達成する手段として有効である。ただし、社会的ジレンマ（SD）状況では特定の人だけに協力することが構造上できず、選別的利他行動による協力達成は不可能である。しかし、SD 状況に他の社会的交換関係が連結されていれば、SD 非協力者に対して社会的交換関係で選別的利他行動を取ることで、SD での協力を達成できる可能性がある。本研究では、このような連結に基づく選別的利他行動（連結行動）が適応的となる条件を、進化シミュレーションによって検討した。その結果、SD に間接交換状況が連結されると、二次の評判情報を用いて連結行動を取るものが適応的となり、SD 問題は解決した。一方 SD に直接交換状況が連結されても、連結行動は適応的とはならなかった。よって、理論的には直接交換状況との連結によって SD 問題を解決することはできないといえる。

◇O11 『集団間葛藤状況下における多数派同調が内集団協力を与える影響の実験的検討』

横田晋大（総合研究大学院大学）・中西大輔（広島修道大学）

本研究の目的は、集団間葛藤の存在する社会的ジレンマ状況で自集団の他者の行動を参照できることが内集団協力を与える影響を検討することである。横田・中西（2012）による進化シミュレーションでは、複数の集団からなる社会的ジレンマゲームで、集団内の協力率に応じて協力確率を変動させる戦略が適応的であり、また、他者の行動を参照できる条件で特に協力率が高いとの結果が得られた。本研究では、その追試として、他者行動の参照の可否が集団間葛藤状況下での内集団協力を与える影響を実験室実験にて検討した。実験の結果、性差が見られ、参照可能条件では、参照不可能条件よりも、女性は一貫して高い協力率を保つものの、男性は試行経過に伴って協力率を下げ、最終的には参照不可能条件よりも協力率が低くなるという結果が得られた。また、集団間葛藤時には、前回の他者の行動を参照していないことも示唆された。

O12 “A Call for Collaboration to Reproduce Significant Findings in Evolutionary Psychology”

平石 界（慶應義塾大学）・池田功毅（中京大学 / 日本学術振興会）

Psychology now faces a crisis of reproducibility. A recent study by Nosek et al. reported that only 36% of findings in psychology, and 25% in social psychology could be replicated, posing a serious threat to the discipline as a cumulative scientific endeavor, and therefore effective countermeasures must be taken to solve this problem. In this talk, we propose a replication project focusing on evolutionary psychology and would like to call on the members of HBES-J for participation. The project will select significant findings in this research area and (1) utilizes pre-registration system to prevent p-hacking and (2) establishes collaborations among laboratories to increase the sample size and statistical power as much as possible, aiming to create an efficient network for conducting replication studies systematically.

現在、心理学は再現可能性危機に瀕している。最近発表された Nosek らが行った大規模な追試研究では、心理学全体で 36%の再現性しか得られず、特に社会心理学領域ではそれが 25%に落ち込むと報告されている。こうした状況が、心理学の蓄積的發展を阻害することは明白であり、根本的打開策を打ち出さなくてはならない。そこで本発表では、進化心理学に焦点を当てて、具体的な追試プロジェクトの提案を行い、これへの参加を本学会会員へ呼びかけたい。このプロジェクトでは、進化心理学において追試すべき重要な知見を選び出した上で、(1) 事前登録制度の利用して p-hacking を防止すること、(2) 複数ラボ間の協力を通じて、大きなサンプルサイズを確保し、統計検定力をできるだけ高めること、の二点を踏まえ、システムティックに追試を行っていくネットワークを形成したいと考える。

ポスター発表要旨

(♣：若手奨励賞候補、◇：Twitter等での言及禁止希望)

- ♣◇P1 『なぜ5人のきょうだいより1人の他人を選ぶのか？：道徳的ジレンマにおける意思決定への他者からの評価』
小林春菜(名古屋工業大学)・武田美亜(青山学院女子短大)・小田 亮(名古屋工業大学)
- 5人のきょうだいを助けるために1人の他人を殺さなければならないという道徳的ジレンマにおいて、5人のきょうだいを見殺しにする選択をする人が少なからずみられる。これは血縁淘汰理論と矛盾する意思決定であり、そのような選択をする人には、血縁を犠牲にすることに見合った何らかの利益があることが予測される。先行研究は、他人を殺すことを選ぶ人より殺さずにきょうだいを見殺しにする人の方が他者から好印象を持たれることを明らかにした。しかしながら、印象の良さ以外の他者からの評価については検討されていない。そこで本研究では、トロッコ問題においてきょうだいを犠牲にする人としらない人のそれぞれについて、人物評価についての18個の項目(信頼できる人、ずるい人など)がどの程度あてはまるのかについて、学部生に評価してもらった。さらに、一般信頼尺度と他者意識尺度に回答してもらい、それらの得点と選択との関連について検討した。
- ♣P2 『目の絵は嘘を抑制するか？：社会的文脈を用いた検討』
西井悠登(名古屋工業大学)・平石 界(慶應大学)・小田 亮(名古屋工業大学)
- Oda et al. (2015) は、目の絵によって利他的な嘘が抑制されることを明らかにした。しかし一方で、Cai et al. (2015) は、嘘をつけば自分の利益になるような場面において、目の絵があっても嘘が抑制されないことを報告している。Caiらの実験においては課題に社会的な文脈が欠けていることが、その原因であると考えられる。そこで、嘘をつくことが実際に第三者の利益にも影響する場面において参加者に同様の課題を行ってもらい、目の効果を調べた。参加者は簡単な数字の探索課題を行うが、正解1つにつき50円を自分が獲得し、同じ金額が日本赤十字社に寄付される。正答数は自己申告によるので、参加者には嘘をつくインセンティブがある。用紙に目の絵が印刷されている条件と対照条件とのあいだで正答数の申告を比較すると、対照条件では嘘の申告がみられる一方で、目条件においては嘘が抑制されることが予測される。
- ♣P3 『集合知の発生条件を探る：共通の反応関数の形成』
黒田起更(東京大学文学部)・為井智也(奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科)・池田和司(奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科)・小川昭利(順天堂大学医学部)・亀田達也(東京大学大学院人文社会系研究科)
- 集合知が発生するためには、外部刺激に対する反応関数が個体間で一致している必要がある。たとえば社会性昆虫では、群淘汰により、反応関数が一致するように進化が生じた。しかし個体淘汰の強いヒトでは、共通の反応関数を進化的には獲得できないため、相互作用を通じてリアルタイムに反応関数を一致させる必要があるだろう。本研究では、画面に呈示されたドットの数を集団場面で推定するという心理物理学実験によって、この仮説を検討した。参加者は、2人が互いの推定値を参照し合うリアルペア条件、自分と同じ反応関数を持つ「相手」の推定値を参照するクローン条件、他人の推定値を参照できないソロ条件のいずれかに配置された。結果、リアルペア条件では反応関数が個体間で収束し、選択肢のランク付けにおける集団成績が他の条件よりも優れていた。このことは、反応関数の個体間収束が持つ適応的意義を示している。
- ♣P4 『オキシトシン受容体遺伝子、バソプレシン受容体遺伝子と向社会的行動の関連』
仁科国之(玉川大学脳科学研究科)・高岸治人(玉川大学)・井上-村山美穂(京都大学)・高橋英彦(京都大学)・山岸俊男(一橋大学)
- オキシトシンとアルギニンバソプレシンは下垂体後葉から分泌されるホルモンであり、近年、その作用に関連するオキシトシン受容体遺伝子(OXTR rs53576)とアルギニンバソプレシン受容体遺伝子(AVPR1A)が人間の社会性に関連することが明らかになった。本研究の目的は、一般人サンプルを対象に人々が示す向社会行動とOXTR rs53576、およびAVPR1Aの関連を明らかにすることにある。実験の結果、OXTR rs53576は信頼行動と強い関連を示し、協力行動と弱い関連を示したが、いずれも男性のみで見られ女性では見られなかった。一方、AVPR1Aは協力行動のみと関連し、性差は見られなかった。罰行動に関してはOXTR rs53576、およびAVPR1Aとの間に関連は見られなかった。これらの結果は、OXTR rs53576とAVPR1Aは向社会的行動の異なる側面と関連していることを示している。
- ♣P5 『向社会行動は、「今ここ」型意思決定の制約をどう越えるかII～視線パターンと瞳孔サイズの解析～』
上島淳史(東京大学文学部)・齋藤美松(東京大学大学院人文社会系研究科)・谷田林士(大正大学人間学部)・亀田達也(東京大学大学院人文社会系研究科)
- 貧困地域への募金など、ヒトは直接的な互恵関係のない他者を配慮できるが、空間的に遠く、同情心が及びにくい外集団他者の不遇をくみ取るためには、「今・ここ」を離れた抽象度の高い認知過程が必要である。本研究では、UNICEFのプロジェクトであるアフリカ募金・シリア募金を利用した実験を行った。実験参加者は、(1)寄付先を決定したのちに、(2)これまでの他の参加者の寄付状況を参考にして寄付先を再決定した。その際の眼球運動を解析した結果、場面(1)で写真イメージを重視して寄付先を決定した参加者ほど、場面(2)で、これまでの寄付額において劣勢の寄付先に選択を変更する傾向が見られた。この結果は、個々の写真の印象に基づき寄付先を選択する参加者ほど、実験室内でたまたま生じた数百円程度の格差に正義感覚が影響されやすい(ローカルな不平等に影響されやすい)ことを示している。具体的な情報に依存した「今・ここ」型の意思決定は、ローカルな偶然的要素に左右されやすく、外集団他者の不遇を組織的・原理的に考えることの妨げになっている可能性が示唆された。

ポスター発表要旨

(♣ : 若手奨励賞候補、◇ : Twitter 等での言及禁止希望)

♣P6 『不確実状況におけるリーダーによる罰の機能』

堀田結孝 (国立情報学研究所・JST ERATO 河原林巨大グラフプロジェクト)・竹澤正哲 (北海道大学)・山本ひとみ (アサツーディ・ケイ)・加村圭史朗 (無所属)・須山巨基 (北海道大学・日本学術振興会)

公共財問題の解決に罰の導入が有効である事が古くから知られている。これまでの実証的研究では交換の当事者個々人が非協力者に対して直接制裁を与える“個人罰 (peer punishment)”の形態が多く扱われてきたが、個人罰には報復の誘発や反社会的罰 (協力者を罰する行為) など協力の促進を妨げる要素も含まれる。これに対し、集団の代表者に罰行使を委ねる“リーダーによる罰”の有効性が注目されている。しかし、リーダーによる罰の個人罰に対する相対的な有利性を検討した試みは未だ少ない。本研究では、個人罰が有効に機能しないと予想される状況として他者の協力度の情報が不明な状況 (他者の貢献量の情報にノイズが加わる状況) で公共財ゲームを行い、リーダーによる罰がそのような状況でも協力を促進させ得るかを検討した。実験の結果、リーダーによる罰を導入することで罰のない公共財ゲーム時よりも協力率が上昇する傾向が見られた。

♣◇P7 『目の絵と規範の手がかりが寄付に及ぼす影響：フィールド実験による検討』

市橋良太 (名古屋工業大学工学部情報工学科)・小田 亮 (名古屋工業大学)

目の刺激には、社会規範違反行動 (自転車泥棒など) を抑制したり、社会的にふさわしい行動 (ごみの分別など) を助長したりするような効果があることが分かっているが、募金箱への寄付金額に及ぼす影響をフィールドにおいて検証した例はほとんどない。また、目の刺激によって向社会的行動そのものが促進されているのか、あるいは単に規範意識が高められているのかについては議論がある。Fathi et al. (2014) は、透明な募金箱の中身を多くした条件と少なくした条件のそれぞれにおいて、目の効果を調べた。目の絵は寄付金額を増やしたものの、中身が多かったからといって促進されるわけではなかった。この実験は実験室において行われたものだが、本研究では、同様の実験を飲食店に募金箱を設置することにより実施した。また、先行研究では目の写真が使用されたが、本研究ではより様式化された絵を用い、先行研究と同じ結果が得られるか検証する。

P8 “Commitment to Cooperation and Peer Punishment: its Evolution”

Tatsuya Sasaki (University of Vienna)・Isamu Okada (Soka University)・Satoshi Uchida (RINRI Institute)・Xiaojie Chen (University of Electronic Science and Technology of China (UESTC))

Theoretical and empirical studies have generally weighed the effect of peer punishment and pool punishment for sanctioning free riders separately. However, these sanctioning mechanisms often pose a puzzling trade-off between efficiency and stability in detecting and punishing free riders. Here we combine the key aspects of these qualitatively different mechanisms in terms of evolutionary game theory. Based on the dilemmatic donation game, we introduce a strategy of commitment to both cooperation and peer punishment. To make the commitment credible, we assume that those willing to commit have to make a certain deposit. The deposit will be refunded as long as the committers faithfully cooperate in the donation game and punish free riders and non-committers. It turns out that the deposit-based commitment offers both the efficiency of peer punishment and the stability of pool punishment and that the replicator dynamics lead to transitions of different systems: pool punishment to commitment to peer punishment.

♣P9 “An integrated model on the evolution of life history with material and cultural parental contribution on the offspring fitness”

関 元秀 (九州大学大学院システム情報科学研究院)・横尾 真 (九州大学大学院システム情報科学研究院)

Human life history is characterized by a generation overlapping period that is used not only for parental/alloparental care but also for transmission of cultural information from a post-reproductive individual to an infant individual (vertical/oblique transmission). A theoretical study on cultural evolution (Lehmann et al., 2013; Evolution 67:1435-1445) formally showed that, when the amount of cultural information an individual holds positively influences his/her fitness, replacement of a part of reproductive period with the same length of infant period for the vertical/oblique transmission can be evolutionarily favoured. An important piece that the study did not consider was a cost for elongating post-reproductive period, which is also required for the vertical/oblique transmission. We present a new model in which the cost for the post-reproductive period is explicitly considered. We also evaluate an impact of vertical/horizontal transmission on fitness relative to parental care.

ポスター発表要旨

(♣: 若手奨励賞候補、◇: Twitter 等での言及禁止希望)

- ♣P10 『二者の相互作用場面における苦痛に対する感受性の収束過程』
村田藍子(北海道大学・日本学術振興会)・亀田達也(東京大学)

誰かが苦痛を被る場面を見ただけで、自分が苦痛を感じたときと同様の神経活動や生理反応が生じることが知られている(Konvalinka, et al., 2011; Singer et al., 2004)。このように人間の情動反応系は個人の中で閉じられておらず、他者から全く独立ではいられない設計になっているため、人々の苦痛に対する感受性も社会的影響を受けると考えられる。本研究では個人の苦痛刺激に対する感受性がどのように社会的相互作用の影響を受けるのかを検討した。実験では、対面した二人の参加者(友人同士)の前腕部に、同時に湯で熱したアルミ棒を繰り返し当て、刺激に対する自律神経系の生理反応を計測した。結果、最初の数試行では各人の生理反応は互いに影響を受けていなかったが、5試行目以降で、二人の生理反応の相関が高まっていった。この知見は、個人の苦痛刺激に対する感受性が互いに相手の情動表出を参照することによって変容し、収束していくというプロセスの存在を示唆すると考えられる。

- P11 『推論課題における情報優位者の存在と「心の理論」の回答の関係性』
時田真美乃(信州大学)・平石 界(慶應義塾大学)

本研究では、心の理論の推論が優位に活性化される条件を明確にすることを目的とした。これまでに、推論課題に社会的文脈を導入することで、確率判断より心の理論を用いた回答が増加することが示されている。しかし先行研究で用いた文脈では、登場人物の一方が情報優位者であったことが、心の理論の利用を促進していた可能性があった。本研究では、登場する2者間の情報非対称性がない推論課題を作成し、3次及び4次の志向意識水準を使用した心の理論の推論が、確率判断より使用されやすいかを検討した。3次の志向意識水準を利用した回答は確率判断より優先されていたが、4次の志向意識水準を利用した回答は優先されず、先行研究とは異なる傾向が見られた。情報優位者の存在の有無が、「心の理論」の推論の優先されやすさに影響を与える可能性が示唆された。

This study aims to clarify the conditions that produce predominant usage of theory of mind reasoning (ToM reasoning) over statistical reasoning. Preceding studies have shown that social context enhanced the the ToM reasoning. However, such enhancement might have been a product of information asymmetries among the characters in the context. In this study, a reasoning task with a social context without information asymmetry was created. Subjects were required to use the 3rd or 4th intention consciousness level in the task. The results showed that, 1) ToM reasoning was enhanced in the task including 3rd intention consciousness level, and 2) ToM reasoning was minor in the task including 4th intention consciousness level. It was suggested that the presence of information asymmetries affects priority of the reasoning of the Theory of mind.

- ♣P12 『未就学児における他者の協力性に見極めと唾液中オキシトシン濃度との関連』
藤井貴之(玉川大学)・高岸治人(玉川大学)・清成透子(青山学院大学)・岡田浩之(玉川大学)

本研究の目的は、未就学児における他者の協力性に見極めと唾液中オキシトシン(sOT)濃度の関連を検討することにある。50名の未就学児が、上半身が写っている36人分の動画を見て、その人物が良い人か悪い人かを二者択一で判断した。ターゲットの人物は大学生であり、先行研究(kiyonari, 2010)と同様の刺激を用いた。ターゲットは別のゲーム(順次囚人のジレンマゲーム、順次スタグハントゲーム)で一貫して協力を行った人、もしくは一貫して非協力を行った人であった。sOT濃度はELISA法によって測定した。実験の結果、女性ターゲットでは、正答率はランダムよりも高い傾向が見られたが、男性ターゲットではその傾向は見られなかった。またsOT濃度が高い人ほど女性ターゲットの正答率が低いという関連も見られた。これらの結果は、未就学児であっても女性の協力性を見極めることが出来ること、女性の協力性に見極め能力はオキシトシンと関連があることを示している。

- P13 『記憶の進化と累積的文化』
中丸麻由子(東京工業大学)

人は文化を学習し、そして文化レベルを発展させてきた。このような累積的文化には学習や記憶能力は重要な役割を果たしている。学習・記憶のプロセスは符号化、固定化、保持、想起の4つからなる。文化を学習しても保持や想起に失敗してしまうと文化の活用が出来ず、よりレベルの高い文化の発展や学習が難しくなる。つまり想起・保持の進化によって累積的文化が可能となる。しかし適応的な観点から想起・保持コストが高くつく場合には、忘却と学習の繰り返しに進化し、累積的文化が生じなくなるだろう。そこで本研究では個体群動態モデルを基にした進化モデルを構築し、想起・保持能力と社会学習・個体学習能力の共進化が累積的文化に及ぼす影響を調べた。すると、文化レベルが発展しない状況においては、社会学習コストが低いと、忘却と学習の繰り返しの進化する。一方、累積的文化が存在する状況では、想起・保持が学習とともに共進化することを示した。

ポスター発表要旨

(♣ : 若手奨励賞候補、◇ : Twitter 等での言及禁止希望)

- ♣P14 “An exploratory study of third-party punishment and compensation”
佐々木駿太 (神戸大学人文学研究科)・浅井暢子 (京都文教大学総合社会学部)・大坪庸介 (神戸大学人文学研究科)
- Previous studies suggest that people are willing to punish norm violators and compensate victims of norm violation at their own expense even when they are not directly involved in the norm violation. However, only a few studies have investigated whether people engage in both costly punishment and compensation simultaneously, or selectively perform just one of these behaviors. We conducted two vignette experiments in which participants were presented with a description of a norm violation (dishonesty in Study 1 and unfairness in Study 2). Participants then decided how they would react (punish the norm violator, compensate the victim, or do both). The results showed that in response to an honesty norm violation participants are likely to do both punish and compensate, or do nothing at all (Study 1), but in response to a fairness norm violation participant are likely to selectively perform just one of these behaviors (Study 2).
- P15 『第三者サンクション行使に対する行動選択肢数の効果』
真島理恵 (熊本学園大学)・高橋伸幸 (北海道大学)
- 強い互恵性の実証的証拠として、自己利益に結びつかない第三者罰が観察されることが様々な研究から指摘されている (e.g., Fehr & Fischbacher, 2004)。本研究では、これらの第三者罰が「罰する」以外に行動選択肢が存在しないという状況がもたらすアーティファクトである可能性を検討することを目的とし、行動選択肢として「非協力者への罰」と「協力者への報酬」の双方を行使可能な条件下では第三者罰行使が減少するか否かを調べる実験室実験を行った。SD での協力者・非協力者に対して第三者罰のみが可能な罰のみ条件・第三者報酬のみが可能な報酬のみ条件・どちらも可能な両方条件を設定し、サンクション量を比較した。その結果、罰量には条件差がみられなかったが、報酬量は両方条件の方がわずかに小さかった。また、反社会的罰・報酬の行使量は行動選択肢が増えることで減少する可能性が示唆された。
- P16 『3・4 歳児の仲直り行動に影響を与える要因』
大西賢治 (東京大学大学院総合文化研究科)
- 仲直りは他個体との葛藤によって損なわれた関係を修復する行動であり、集団内の他個体との関係を良好に維持する上で重要な行動である。本研究では、社会的能力が発達してきて、仲直り行動も増えてくる 3・4 歳児のヒト幼児を対象にいざこざ発生後から仲直りが成立、または不成立に至るまでの過程を詳細に検討した。特に、心の理論、語彙量、他者情動の理解が仲直り行動に与える影響を調べた。いざこざを起こした児 (開始児) が心の理論を獲得していると開始児からの仲直りの試みが起こりやすかったが、いざこざの受け手が心の理論を獲得しているかどうかは仲直りと関連しなかった。最初に攻撃行動を起こしてしまい罪悪感をいだきやすい立場の開始児でのみ、相手の心的状態を理解できる児がより仲直りを試みていた。また、3・4 歳児の仲直り行動と語彙能力は多くの点で関連しており、言語能力の高い児が仲直りの主導権を握っている事が示唆された。
- ♣◇P17 『イヌにおけるヒトの信頼性の評価』
高岡祥子 (明治学院大学心理学部)・藤田和生 (京都大学大学院文学研究科)
- イヌがヒトの行動を観察してその人物の信頼性を評価し、その評価を利用して、柔軟に行動調節を行うのかを検討した。イヌはヒトのジェスチャーの利用に優れ、選択課題ではヒトの指さしに従って容易に正解を選ぶ。実験 1 では、選択課題で実験者がわざと不正解の選択肢を指さす (欺きの指さし) 様子を観察した後では、実験者が正しい選択肢を指さしても、イヌがこの実験者の指さしに従うことを躊躇し、イヌが盲目的にヒトの指さしに従っているわけではないことが示唆された。実験 2 では、実験者の欺きの指さしを観察後でも、イヌは新奇な実験者の指さしであれば従うことを確認した。実験 3 では、事前にイヌの期待に沿った行動をした信頼性の高い実験者と、イヌの期待に沿わない行動をした信頼性の低い実験者を設定した後に、指さしを手がかりとした選択課題を行い、イヌがそれぞれの実験者の信頼性の評価を選択課題に般化させ、柔軟な行動調節を行うのか検討した。
- ♣P18 『Dark Triad は自身のことをどう思っているか? : Dark Triad 傾向と印象の自己評定との関連』
喜入 暁 (法政大学大学院人文科学研究科)・越智啓太 (法政大学文学部)
- 社会的に望ましくない 3 つのパーソナリティ (マキャベリアニズム傾向、サイコパシー傾向、ナルシシズム傾向) の集合的パーソナリティとして Dark Triad 傾向 (D3) という概念が提唱されており、様々なパーソナリティ特徴や行動傾向との関連が検討されている。これらの知見から、D3 は早い生活史戦略をとることが多くの研究で指摘されている。本研究 (N=70) では、D3 と自身の外見の印象 (紳士/淑女的、親しみやすさ、活動性、セクシーさ、関係望ましさ) の自己評価との関連を検討した。Big Five および自尊感情を統制した結果、D3 紳士/淑女的、活動的の自己評定に正の関連が示された。D3 の各側面においては、マキャベリアニズム傾向と紳士/淑女的、活動性と正の関連が示され、サイコパシー傾向と紳士/淑女的との正の関連が示された。これらはいずれも第一印象形成に重要であると考えられ、早い生活史戦略理論と一致する。

ポスター発表要旨

(♣ : 若手奨励賞候補、◇ : Twitter 等での言及禁止希望)

- ♣P19 “Is there really no such thing as moral outrage?”
小西直喜 (神戸大学人文学研究科)・大坪庸介 (神戸大学人文学研究科)

People are willing to incur costs to punish norm violators (Gintis, 2000). Although moral outrage is typically conceived as a proximate emotional cause of this sort of punishment, Batson and colleagues' experiments (2007) showed that moral violations did not evoke anger from third-parties. What then motivates third-party punishment? To clarify this ambiguity, we wrote a wide range of moral violation scenarios for a vignette experiment, and tested the generalizability of Batson's argument. Our results showed that participants indeed felt anger, but that this anger was positively correlated with a belief in other people's negative reaction to the hypothetical moral violation. In other words, people were angrier when they believed that other members in their community would disapprove of the norm violation. These results imply that moral outrage alone does not explain why people are willing to police socially shared norms; people also place weight on the perceived disapproval of others.

- ♣P20 “The Evolutionary Stability of the Intention Signaling Strategy for Indirect Reciprocity”
Hiroki Tanaka (Kobe University, Japan Society for the Promotion of Science)・Hisashi Ohtsuki (The Graduate University for Advanced Studies)・Yohsuke Ohtsubo (Kobe University)

A known set of ESSs for indirect reciprocity are collectively called the leading eight (Ohtsuki & Iwasa, 2004, 2006). Although all of the leading eight assume that players use second-order reputation information (i.e., the current partner's previous partner's reputation), an experimental study showed that people do not utilize this sort of information (Milinski et al., 2001). To resolve this theoretical and empirical discrepancy, we propose the Intention Signaling Strategy (intSIG), which allows punishers to manage their own impression by voluntarily giving up a resource. We have previously shown that people behave in an intSIG-like manner. In the present study, we investigate under what conditions intSIG is evolutionarily stable against ALLD and ALLC. Our evolutionary game analysis demonstrated that intSIG is impervious to invasion by ALLD and ALLC under the exact same condition, and thus intSIG is an ESS under this condition. Here, we report the details of this ESS analysis.

- ♣◇P21 私たちはどのようにして利己的な行動を抑制しているのか？ 行動実験から考えられる2つの経路とその神経基盤についての展望
“How do people inhibit selfish behavior? -Two internal ways of inhibition from a behavioral experiment and the future investigation of their neural bases-”
富永仁志 (京都大学大学院人間・環境学研究科)・阿部修士 (京都大学こころの未来研究センター)・内田由紀子 (京都大学こころの未来研究センター)

利己的行動の抑制は、互恵性において重要な役割を担っている(例:フリーライダーの抑止)。先行研究では、罰規範のようなマクロ理論は検証されてきた一方で、個々人が利己的行動を抑制する内的メカニズムの検証は少ない。この問題を検討するため、行動実験を実施した。参加者はパートナーと自身の追加報酬の配分を決定する課題を与えられ、そのほかに行動抑制尺度(BIS)や負の感情(悲しみ、怒り等)についての質問等に回答した。利己的試行(自身が報酬を獲得し、パートナーが損失を被る)と利他的試行(自身が損失を被り、パートナーが報酬を獲得する)の承諾率を個別に計算したところ、利己的試行の承諾率のみがBIS得点と負に関連し、負の感情の増加を予測することが明らかとなった。これらの結果から、利己的行動の抑制には認知的経路と感情的経路とがあると考え、各経路についての考察と、これらの神経基盤を検討する今後の展望について説明する。

Inhibition of selfishness plays an important role of our reciprocity (e.g., preventing free-rider). Previous studies examined macro theories such as punishment, but few studies examined micro mechanisms in which individuals inhibit their selfish behavior. To approach this issue, we conducted behavioral experiments where participants conducted a reward allocation task with a partner and answered several questionnaires including Behavioral Inhibition Scale (BIS) and about their negative affects (e.g., sadness, anger, etc.). The acceptance ratios in selfish trials, where participants gain but their partners lose money, and in prosocial trials, where participants lose but their partners gain money, were separately calculated. We found that BIS score was negatively associated only with the acceptance ratio of selfish trials, which predicted the negative affects. These results indicate that the inhibition of selfishness is supported by the cognitive and emotional routes. Possible neural basis of these mechanism and future direction are discussed.

ポスター発表要旨

(♣：若手奨励賞候補、◇：Twitter等での言及禁止希望)

- ♣P22 『自己の配偶価値がパートナー獲得戦略の選択に及ぼす影響』
山田順子(北海道大学大学院文学研究科)・鬼頭美江(明治学院大学社会学部)・結城雅樹(北海道大学大学院文学研究科)
- 人間の配偶者獲得戦略には、自己が持つ他者よりも優れた特性や豊富な資源量を示す「自己価値誇示」や、自ら他の異性との配偶機会を放棄することで相手に安心を提供し、配偶者との排他的関係を形成する「コミットメント表明」がある。これらの戦略のいずれを選択するかは、個人の配偶者としての質の高さ(配偶価値)に影響されるだろう。なぜなら、配偶価値が高ければより多くの異性を惹き付けられるが、価値が低い場合は惹き付けられる異性の見込みが低い。むしろ、配偶価値が低い場合は、特定の異性と排他的な関係を形成した方が、より確実な配偶成功を獲得できるため利益が高いだろう。実験の結果、予想通り配偶価値の高い個人は低価値者よりも自己価値誇示をとる傾向が示されたが、コミットメント表明行動の採択度には配偶価値による差は見られなかった。この結果は、個人が自分の市場価値に基づいて配偶者獲得戦略を変えている可能性を示唆している。
- ♣P23 『強化学習に基づく共感の計算モデル構築』
齋藤菜月(名古屋大学環境学研究科)・大平英樹(名古屋大学環境学研究科)
- 近年、共感の下位概念同士の相互的影響が報告されており、それらを同時かつ定量的に測定することは重要な課題である。そこで本研究では他者選択を予測する学習課題を用い、強化学習モデルによる共感の定量的モデル化を試みた。参加者は自己試行では聴覚的嫌悪刺激を避け、他者予測試行では他者選択を予測するように教示された。また、嫌悪刺激に先立ち呈示される予告刺激の意味が自己と他者で逆である不一致ブロックと、同じである一致ブロックの両方に参加した。その結果、不一致ブロックでの結果に対する学習率が高いほど、他者のノイズ予告刺激に対する心拍の定位反応が大きい傾向にあった。ノイズへの自律神経系の覚醒が高いほど結果の学習が速いという点でモデルの妥当性を一部支持すると考えられる。また他者行動に対する学習率と共感特性の個人的苦痛得点に負の相関が見られたことから、感情的共感の低さを表すことが示唆された。
- ◇P24 『ヒヒの発情タイミングの重複に関する分析』
井原泰雄(東京大学)・小田 亮(名古屋工業大学)・粕谷英一(九州大学)・松本晶子(琉球大学)
- 霊長類の群あたりの雄の数は、繁殖可能な雌の空間的・時間的分布に影響を受ける。種間比較によれば、群あたりの雄の数は、雌の数が多いほど、また雌の発情タイミングが重複しているほど多い傾向がある。このことは、多数の雌が同時に発情すると、優位雄による配偶者防衛が不完全になり、他の雄の繁殖機会が増加するという仮説と合致する。一方、雌は発情タイミングを積極的に重複させることにより、複雄群の形成を促し、これにより群外の雄による子殺しの危険を小さくできる可能性がある。また反対に、発情タイミングを分散させることで、優位雄との交尾を確実にできるかもしれない。実際、野生チンパンジーの群で、雌の発情周期が相互に独立である場合と比べて、発情タイミングが分散していることが示されている。私達は、ゴンベ・ストリーム国立公園に生息する4群のアヌビスヒヒについて、発情タイミングの重複に関する分析を行った。その結果を報告する。
- ♣P25 『他者痛み観察時の反応における場面と表情の違いの検討』
河村康佑(千葉大学大学院人文社会科学部)・若林明雄(千葉大学)
- 他者が痛みを受けている状況を観察した時の不快感に関する研究では、「他者が痛みを受けている」点が重視され、痛み場面(例：包丁で手を切る)と痛み表情に対する反応の違いは検討されていなかった。実験1では、痛み場面と痛み表情の画像を刺激に用い、観察時の痛みの推定と不快感を比較した。実験参加者は、呈示された刺激について「写真の人物がどれだけ痛みを感じていると思うか(痛み評定)」と「自身がどれだけ不快に感じたか(不快評定)」を0-10で評定した。その結果、痛み評定では場面と表情で差が無いに関わらず、不快評定では痛み場面の方が有意に高かった。この結果から、他者痛み観察時の不快感には、場面特有の要因があることが示唆された。実験2では、実験刺激として場面と表情を同時に収めた動画をを用い、実験1と同様の評定を求める。仮説に基づけば、切創条件の時、ターゲットの反応に関わらず不快評定が高くなると考えられる。

ポスター発表要旨

(♣ : 若手奨励賞候補、◇ : Twitter 等での言及禁止希望)

- ◇P26 “Maximization of “Happiness” (= biological fitness and self-enhancement): a mathematical model of fertility decline in humans”

Masahito Morita (SOKENDAI / JSPS, Japan) · Hisashi Ohtsuki (SOKENDAI, Japan) · Hanna Kokko (University of Zurich, Switzerland) · Mariko Hiraiwa-Hasegawa (SOKENDAI, Japan)

Fertility decline is a paradoxical phenomenon in the evolution of human behavior. To understand human reproductive strategies, we need to explain how parents allocate their wealth to offspring. In this study, we analyze the wealth-fertility relationship from the perspectives of peer competition among children and self-enhancement. Some examples of self-enhancement are dressing in designer clothing, acquiring luxury cars, and enjoying leisure activities. These may be extreme examples, but it is reasonable to assume that, in modern life-styles, people have attractive options that do not directly enhance their reproductive success. We assume that parents try to maximize “Happiness”, the combination of biological fitness and self-enhancement; this assumption is deviated from purely evolutionary models. Our mathematical models predict that high investment in child quality and self-enhancement should reduce fertility. These results would match the situation observed in modern, low-fertility societies. In our presentation, we will compare the results from several models.

- ♣P27 『綺麗な人は他人の顔をよく覚える？ 記憶主体の外見的特性が顔記憶成績に及ぼす影響』

李 楊 (玉川大学) · 中嶋智史 (NTT コミュニケーション科学基礎研究所) · 松本良恵 (玉川大学) · 山岸俊男 (一橋大学)

従来の顔記憶研究においては、刺激側の要因、たとえば、人種、性別、魅力度などの様々な顔の特性がどのように顔記憶成績に影響するかが検討されてきた。一方で、抑うつ・不安傾向など一部の性格特性を除いて、記憶する主体の側の特性の影響についてはほとんど検討されていない。本研究では、記憶主体の特性によって顔記憶成績が異なるかについて、記憶主体の外見的特性に着目し検討した。実験では、非学生参加者 461 名 (男性 230 名、女性 231 名) に笑顔、怒り顔、真顔の日本人の顔写真を学習させ、5 分間の遅延の後に Yes/No 再認課題を行わせた。また、各参加者の顔を撮影し、学生参加者にその顔の魅力度、信頼性などを評定させた。実験の結果、顔の魅力度と再認成績の間に正の相関が見られ、魅力的と評価された人物ほど顔の再認成績が高かった。さらに参加者の顔の魅力度は、参加者の IQ や外向性などの性格特性とは独立に再認成績に影響していた。

- ♣◇P28 『学習戦略の環境依存性 ヒヨコは易しい環境条件では習慣依存的に学ぶ』

中村光宏 (総合研究大学院大学先導科学研究科) · 川森 愛 (統計数理研究所統計思考院 · 総合研究大学院大学先導科学研究科)

リスク感受性採餌理論では、動物は環境条件 その状況で十分な栄養を得る見込みがあるか に応じてリスク感受性 (価値関数の形) を変化させ、より繁殖価に貢献する採餌を行うとされる。価値は動的な学習過程を経て計算されるはずである。その学習過程はどのように環境依存するだろうか？ 代表的な学習モデルに Rescorla-Wagner (RW) 型と Roth-Erev (RE) 型がある。RW 型は価値が漸的に収束する。RE 型は、ある選択肢を選べば選ぶほどその価値が高まり、習慣性を持つ。本研究では、環境条件を変えたヒヨコの採餌実験データから学習過程をベイズ推定し、条件によってどちらのモデルに近いかを調べた。環境が厳しい (期待餌量が少ない) 条件では RW 型に近く、易しい (期待餌量が多い) 条件では RE 型に近い傾向が観察された。この傾向は環境が高リスクのとき顕著である。環境に応じて適応的な学習戦略が異なることが示唆される。

- ♣P29 『個人の情報精度と集合的決定の一貫性との関係』

関口卓也 (日本学術振興会 · 総合研究大学院大学) · 大槻 久 (総合研究大学院大学)

人間集団の意思決定は論理的に結合した複雑な議題に対してのものであることが多い。本研究では、2つの命題の真理値を当てられる確率が 0.5 以上である個人を想定し、彼らの判断には相関があると仮定する。ここで、各人が2つの判断を結合した結果を多数決にかけると、命題ごとの多数決の帰結を結合させる場合とでは、集合的決定が異なることがある。分析の結果、相関がない場合は、各人の正答率を高めることが上記のジレンマを解消することにつながるが、判断が相関する場合は、正答率とジレンマの生起確率とが非単調な関係になり得ることが分かった。更に本報告では、この非単調性が見られる可能性が2つの命題の真理値の組み合わせにどの程度依存するかも調べた。その結果、1つ目と2つ目の命題の真理値を並べて書くとすると、TT の場合も FF の場合も、上述の非単調な関係は生じ得るが、前者の方がそれが生じるパラメータ領域が広いことが分かった。

ポスター発表要旨

(♣: 若手奨励賞候補、◇: Twitter 等での言及禁止希望)

- ♣P30 『協働行為 相互扶助行動 は利他行動を促進するか?』
井上裕香子(東京大学大学院総合文化研究科)・熊谷嘉人(青山学院大学社会情報学部)・清成透子(青山学院大学社会情報学部)・長谷川寿一(東京大学大学院総合文化研究科)
- 自己利益に還元されない利他的傾向性がなぜ進化したのかについては、これまで様々な分野で検討されてきたが、自己利益の観点から解釈可能な相互扶助行動 行為者双方が利益を得る協働行為 - にはあまり関心が払われてこなかった。ところが近年、実験ゲーム研究において相互扶助経験が利他行動を促進する知見(Ahnら, 2001)や、利他性の進化に関して相互扶助の果たす役割の重要性が指摘されている(Tomasello, 2009)。ただし、それ自身が適応的な相互扶助行動が、なぜコストのかかる利他行動を促進するのか理由は明らかでない。そこで本研究は、利得構造の異なる4つのゲームを用いて相互扶助の如何なる側面が利他行動を促進するかを実験で検討した。その結果、単独では小さな利益しか獲得できず協働で大きな利益を獲得可能な相互扶助ゲームの経験で利他行動が促進されたのと同様に、他者と同じ行動を選択するだけで利益を獲得できるゲームの経験でも利他行動が促進された。
- ♣P31 『ウマからヒトへ送られる社会的信号とは? 異種間コミュニケーションの実験的検証』
リングホーファー萌奈美(神戸大学大学院国際文化学研究所)・山本真也(神戸大学大学院国際文化学研究所)
- ヒト社会と密接に関わる動物では、異種であるヒトとの間でコミュニケーションが発達するといわれている。ウマにおいては、これまでヒトの指差しや注意状態に対する理解を示す報告はあるが、ウマからヒトへ送る信号の伝達方法に関しては明らかになっていない。本研究では、ウマの届かない場所にエサが隠された場合、そのエサに関する知識がないヒトに対して、エサの情報や欲求を伝えるかを、ウマの行動と滞在場所に注目して検証した。結果、エサおよびヒトが存在する条件においては、エサあるいはヒトのどちらかのみが存在する条件と比べ、ヒトへの注視行動と鼻で押す行動が出現する時間が有意に増加した。これにより、ウマは自らエサを取ろうとするのではなく、エサに到達可能であるヒトに社会的な信号を送り、欲求を伝えたと考えられた。ウマは、異種であるヒトに対して信号を伝達する方法を、人との関わりの中で身に付けた可能性がある。
- ♣P32 『協力行動の年齢効果の検討』
松本良恵(玉川大学)・李 楊(玉川大学)・山岸俊男(一橋大学)
- 協力行動を予測することで知られる社会的価値志向性(Social value orientation: 以下SVO)における向社会性を持つ人の割合は、年齢と共に増加するとされている(Van Lange et al, 1997)。本研究では、協力行動においても向社会性と同様の年齢効果がみられるかを検討した。その結果、経済ゲームにおける協力行動は年齢と正の相関を示し、向社会性の影響を取り除いてもその効果が見られた。しかしこの年齢効果を生み出しているのは、SVOにおける向自己性を持つ人の中でもIQが100以上の人たちであった。この効果は性別、現在の婚姻の有無、収入、配偶者の収入、子どもの数などの人口統計学的変数を統制しても維持された。このことから、IQの高い向自己的な人々の置かれた客観的な環境のみならず、その環境に対する主観的な捉え方の年齢に伴う変化について検討する必要があるだろう。
- ♣P33 『「イコト」は協力行動を促進するか? : ウィンドフォールゲームによる実験的アプローチ』
後藤 晶(山梨英和大学)
- 本稿においては突然起こる「幸運」を「ウィンドフォール」と定義する。その上で、時期についてあいまい性を有する「ウィンドフォール」の「予告」及び「発生」が公共財ゲームにおける自発的貢献に与える影響について検討を行う。そのために繰り返し公共財ゲームをベースとした、プレイヤーの保有額に変動が生じる「ウィンドフォールゲーム」を用いて実験的な検証を行った。カストロフゲームとは、繰り返しのどこかでプレイヤーの保有額がプレイヤーの意思決定とは無関係に増加するゲームである。獲得額の繰り返しがある10期繰り返し4人公共財ゲームおよび同ゲームを改変したウィンドフォールゲームをパートナーマッチングにて実施した。この時、保有額が3倍になるウィンドフォールが全員に発生する条件と、4人のうち、2人のプレイヤーに発生する条件の2種類を実施した。その結果、ウィンドフォールの「予告」は協力行動の促進に有意な影響を与えた一方で、ウィンドフォールの発生は協力行動の低下が認められた。
- ♣P34 『小さく損して大きく得する: 小ステイクサイズ協力戦略の、シミュレーションを用いた検討』
植村友里(淑徳大学大学院総合福祉研究科)・神 信人(淑徳大学総合福祉学部)
- これまで、囚人のジレンマゲームにおける金銭的利得の大きさ(stake size: SS)の効果は、多くの場合、協力行動に大きな影響を及ぼさないことが報告されてきた(e.g., Clark & Sefton, 2001)。しかし、こうした研究の多くは、SSの効果に参加者間で測定しており、その効果に参加者内で測定した場合は、SSが小さな時は協力し、大きくなるほど非協力的になることが指摘されている(松本・李・山岸, 2013)。この知見は、人は交換する財の価値が小さい場合は協力的でありながら、それが大きくなれば裏切りに転じることを示唆している。本研究では、複数のSSが混在する環境をコンピュータ・シミュレーション上に構築し、SSが小さな時には協力し、大きくなるほど非協力的になる行動戦略が、どのような社会構造において適応的となるか検討した。その結果、個人の財に制限のある社会構造においては、小さなSSほど協力的な行動戦略を採用するagentが進化することが示された。

ポスター発表要旨

(♣ : 若手奨励賞候補、◇ : Twitter 等での言及禁止希望)

- ♣P35 『恋愛における誠意の伝達とコストリー・シグナリング』
石井辰典 (東京成徳大学)

本研究では、コストリー・シグナリング理論に基づき、恋愛感情の告白において、時間的・金銭的・認知的コストがかかった告白の方が誠意がより強く伝わるという仮説を検討した。大学生を対象に参加者を募り、コスト高群(ノ低軍)に「相手は2週間前(ノ前日)から準備した12000円(ノ5000円)のプレゼントを、以前から行きたいと言っていた(ノグルメサイトで見つけた)レストランであなたに渡ししてくれた。店を出た後、告白された」というシナリオを呈示した。その後「相手はどれだけ真剣か」、「どの程度強く誠意を感じるか」といった質問に回答を求めた。コスト高群の参加者の方が低群よりも、相手の真剣さや誠意の強さを高く評価すると予測できる。また、告白の手段に対面 or 電子メールの2種類を設け、コストの高低×告白手段の4条件で結果がどう異なるかについても探索的に検討を行った。結果は学会当日に報告する。

- ♣P36 “Do Facial Expressions Automatically Capture Attention?: Comparison between RT and ERP”
池田功毅 (中京大学・日本学術振興会)・斎藤貴久与 (中京大学)

It has been hypothesized that affective stimuli including facial expressions have evolutionary significance and therefore can capture observer’s spatial attention automatically. Recent behavioral studies, however, have cast doubts to this theory by showing non-trivial instabilities of the results. For example, although the so-called dot-probe task has been assumed to be a gold standard for detecting this phenomenon, a recent high-powered study revealed that it is not (always) the case (Kappenman, Farrens, Luck, & Proudfit, 2014). On the other hand, a neural (ERP) index of spatial attention called the N2pc has emerged as a more reliable measurement. We conducted several studies using this ERP component in order to re-examine the issue, especially regarding facial expressions. Results showed that although attention is robustly captured by facial expressions, its size remains small and therefore could not always be detected by response time.

顔表情を含む情動刺激は、その進化的重要性から、観察者の空間的注意を自動的に捕捉すると考えられてきた。しかしながら近年の行動指標を用いた研究では、これまで証拠とされてきた実験結果が、実際には不安定なものであることが示され、この仮説に疑問が投げかけられている。例えば、いわゆるドット・プローブ課題は、この現象の証拠としてよく用いられてきたが、統計的検定力を高めて行われた近年の研究では、予測通りの結果が得られなかった (Kappenman, Farrens, Luck, & Proudfit, 2014)。その一方で、空間的注意の神経指標である N2pc と呼ばれる ERP 成分が注目を集めている。本研究ではこの N2pc 成分を用い、特に顔表情を対象としてこの問題を再検証した。結果、顔表情は確かに注意を捕捉しているものの、そのサイズが小さいため、反応時間では探知できない場合があることが確認された。

- ♣◇P37 『実験室ラットの痛み表情認知における情動的文脈および個体特性の影響：痛み経験、優劣関係および不安傾向に着目した検討』
中嶋智史 (NTT コミュニケーション科学基礎研究所)・請園正敏 (明治学院大学)・高野裕治 (同志社大学)

他者のシグナルを認知し、適切な行動を取ることは社会的動物にとって重要な能力である。筆者らは先行研究により実験室ラットが写真から他個体の痛み表情と中性表情を識別すること、またその識別は低次元な画像的特徴に基づくものではないことを報告した。しかし、ラットが情動的な要因によって各表情を識別していたかは未だ明らかでない。本研究では、文脈としての痛み経験の有無、および個体特性としての優劣関係および不安傾向が表情認知に及ぼす影響について検討した。実験の結果、他個体のいる社会的場面で痛みを経験したラットは単独で痛みを経験したラットや痛みを経験しなかったラットに比べて、痛み表情よりも中性表情に接近する時間が長かった。また、不安傾向が高いほど、優位個体であるほど痛み表情を避け、中性表情に接近する時間が長かった。これらの結果より、ラットの表情認知が認知主体の情動状態および特性と強く関連していることが示唆された。

【宿泊案内】

《周辺地図》



《湘南国際村センターご利用の皆様へ》

- 大会 web を通じて予約された方については、大会本部が一括して宿泊予約の申し込みをしております。事前に宿泊予約の変更・キャンセルをされたい方は、宿泊施設に直接連絡するのではなく、必ず 大会本部を通して（宿泊担当・森本 morimotoyk [at] soken.ac.jp まで）ご連絡下さい。
- 直前や当日のキャンセルに関しては、所定のキャンセル料が発生することがあります。この場合、キャンセル料の実費を大会本部からご請求致しますので、あらかじめご了承下さい。
- 大会 web を通じて予約された方については、大会受付にて宿泊代金（+予約された方は朝食代）を頂きますので、宿泊施設に直接お支払い頂く必要はありません。ただし新たに何かを注文した等、部屋付けの個人精算に関してはチェックアウト時に当該代金を各自お支払い下さい。
- 当日の遅着連絡や施設に関する質問など、予約とは直接関係ない事項に関しては、宿泊施設に直接ご連絡下さい。
- シングルの宿泊代金は一泊 8,794 円/人、エコノミーツインの宿泊代金は一泊 6,943 円/人、朝食代金は 1,338 円/人です。
- シングルをご予約の方は当日「シングル」もしくは「スタジオツイン」タイプのお部屋にご案内致します。いずれも 1 人利用のお部屋で、代金も上記シングル代金と同じですのご安心下さい。
- ホテルは大会会場から徒歩約 2 分の場所にあります。
- ホテル最寄りのバス停は「湘南国際村センター前」です。ただし JR 逗子駅・京急新逗子駅より急行バスに乗っておいでの方は、「湘南国際村間門沢調整池」バス停で下車下さい。そのバス停から坂道を登って歩いて約 11 分でホテルに着きます。
- フロントの電話番号は 046-855-1810 です。
- チェックイン時刻は 15:00- です。
- 到着が 23:00 以降になる場合は、必ず予めフロントまでご連絡 下さい。
- 23:00 には正面玄関が閉まります。それ以降は正面玄関横のインターフォンで警備員を呼び出して下さい。
- 朝食は 7:30-9:00 です。
- 朝食を予約されていない方は、坂道を下って約 9 分の位置にあるファミリーマートで朝食をお買い求めになると便利です。バスで総研大へおいでの方で、あらかじめ翌朝の朝食を買ってから宿泊施設をご利用予定の方は、「湘南国際村間門沢調整池」バス停でお降りになると便利です。
- チェックアウト時刻は 10:00 です。
- ホテル内では無料 wifi が使用可能です。
- 駐車場は無料でご利用いただけます。駐車場の入口は 23:00 に閉鎖、出口は 24:00 に閉鎖されます。翌朝は 5:30 頃に駐車場が開きます。

《IPC 生産性国際交流センターご利用の皆様へ》

- 大会 web を通じて予約された方については、大会本部が一括して宿泊予約の申し込みをしております。事前に宿泊予約の変更・キャンセルをされたい方は、宿泊施設に直接連絡するのではなく、必ず 大会本部を通して（宿泊担当・森本 morimotoyk [at] soken.ac.jp まで）ご連絡下さい。
- 直前や当日のキャンセルに関しては、所定のキャンセル料が発生することがあります。この場合、キャンセル料の実費を大会本部からご請求致しますので、あらかじめご了承下さい。
- 大会 web を通じて予約された方については、大会受付にて宿泊代金（+予約された方は朝食代）を頂きますので、宿泊施設に直接お支払い頂く必要はありません。
- 当日の遅着連絡や施設に関する質問など、予約とは直接関係ない事項に関しては、宿泊施設に直接ご連絡下さい。
- シングルの宿泊代金は一泊 6,588 円/人、朝食代金は 1,080 円/人です。
- 宿泊施設は大会会場から徒歩約 2 分の場所にあります。
- 宿泊施設最寄りのバス停は「湘南国際村センター前」です。ただし JR 逗子駅・京急新逗子駅より急行バスに乗っておいでの方は、「湘南国際村間門沢調整池」バス停で下車下さい。そのバス停から坂道を登って歩いて約 11 分で宿泊施設に着きます。
- フロントの電話番号は 046-858-2900 です。ただし 22:00 以降はフロントが不在 となります。ご注意下さい。
- 当宿泊施設には 門限 があります。23:00-翌朝 6:00 までは正面玄関が閉まります。外から入ることも、外に出ることもできなくなりますのでくれぐれもご注意下さい。
- チェックイン時刻は 15:00-です。
- チェックイン・チェックアウトは各自でお願いします。
- 到着が 22:00 以降になる場合は、必ず予めフロントまでご連絡 下さい。連絡いただけない場合はチェックインが出来ない場合があります。
- 朝食は 7:30-8:30 です。
- 朝食を予約されていない方は、坂道を下って約 9 分の位置にあるファミリーマートで朝食をお買い求めになると便利です。バスで総研大へおいでの方で、あらかじめ翌朝の朝食を買ってから宿泊施設をご利用予定の方は、「湘南国際村間門沢調整池」バス停でお降りになると便利です。
- チェックアウト時刻は 10:00 です。
- インターネットは各室で有線接続が可能です（ケーブルの準備あり）。また、ロビーでは無線 wifi が使用可能です。いずれも無料でご利用いただけます。
- 駐車場は無料でご利用いただけます。駐車場 P1 をご利用下さい。P2 は普段は閉鎖されています。車をお停めになりましたらフロントにて利用登録をお願いします。

《総研大宿泊施設ご利用の皆様へ》

全ての皆様へ

- 大会 web を通じて予約された方については、大会本部が一括して宿泊予約の申し込みをしております。事前に宿泊予約の変更・キャンセルをされたい方は、宿泊施設に直接連絡するのではなく、必ず 大会本部を通して（宿泊担当・森本 morimotoyk [at] soken.ac.jp まで）ご連絡下さい。
- 直前や当日のキャンセルに関しては、所定のキャンセル料が発生することがあります。この場合、キャンセル料の実費を大会本部からご請求致しますので、あらかじめご了承下さい。
- 大会 web を通じて予約された方については、大会受付にて宿泊代金を頂きますので、宿泊施設に直接お支払い頂く必要はありません。
- 当日の遅着連絡や施設に関する質問など、予約とは直接関係ない事項に関しては、宿泊施設に直接ご連絡下さい。
- 宿泊代金は一般利用者（学生以外）が一泊 2,000 円/人、学生が一泊 1,000 円/人です。これらの金額は 1 室を 1 人でご利用の場合です。1 室を複数人でご利用の際は割引がございます。
- 宿泊施設は総研大葉山キャンパス共通棟の 2F 東側にあります。
- 宿泊施設最寄りのバス停は「湘南国際村センター前」です。ただし JR 逗子駅・京急新逗子駅より急行バスに乗っておいでの方は、「湘南国際村間門沢調整池」バス停で下車下さい。そのバス停から坂道を登って歩いて約 9 分で総研大に着きます。
- 管理人室の電話番号は 046-858-1536 です。ただし管理人が館内巡回をしており、不在にしていることもあります。
- 大会開催時間帯を除いては、すべての出入り口は共通棟東端のオートロック式扉のみです（下図）。建物の外に出るときは 必ずカードキーをお持ちになって下さい。



- － 建物の外から中に入るときは、扉の左側にある銀製のボックスを開け（写真 2）、中のカードリーダーにカードキーをかざして下さい（写真 3）。扉が解錠されます。
- － 建物の中から外に出るときは、扉の左側の壁にあります緑のボタンを押して下さい。扉が解錠されます。
- － 万が一外から入れなくなった場合には、扉をロックして管理人にお知らせ頂くか、もしくは管理人が館内を巡回中の際には、管理人室カウンターに連絡先携帯電話番号が掲示してありますので、そちらにお電話をおかけ下さい。



写真 2: 右側のボックスの中にカードリーダーがあります

写真 3: このカードリーダーにカードキーをかざします

- チェックイン時刻は 15:00- です。
- 到着が 22:00 以降になる場合は、予め管理人室までご連絡下さい。
- 2F にはお部屋の他に談話室があり、23:00 までご自由にお使いいただけます。使い終わりましたら後片付けにご協力願います。また、ご利用にあたっては扉を開けたままにしないなど、他のお部屋のお客様にご配慮をお願い致します。
- 朝食のご用意はありません。
- 総研大内には自動販売機があるのみです。朝食は坂道を下って約 7 分の位置にあるファミリーマートでお買い求めになるのが便利です。バスで総研大へおいでの方で、あらかじめ翌朝の朝食を買ってから宿泊施設をご利用予定の方は、「湘南国際村間門沢調整池」バス停でお降りになると便利です。
- チェックアウト時刻は 10:00 です。チェックアウトは各自 をお願いします。共通棟 1F の端にある管理人室までお部屋のカードキーと鍵をお返し下さい。管理人が不在の場合は、管理人室前にあるボックスの中までお戻し下さい。
- インターネットは各室で有線接続が可能です。ケーブルはお部屋に準備があります。また、無線 wifi も使用可能ですが、場所によっては電波の弱いところもあります。その場合は 1F ロビーでご利用下さい。ID やパスワードは事前にご連絡致します。
- お部屋には次の設備があります。歯ブラシおよび歯磨き粉のご用意がないので、お持ちになることをお勧め致します。
 - － 浴室（浴槽（シャワー付き）、洗面台、トイレ）、ベッド、冷蔵庫、電子レンジ、電気ポット、机・椅子、応接セット、テレビ、内線電話、ゴミ箱、目覚まし時計、常備灯、ドライヤー、学内 LAN に接続できる情報コンセント、ボディソープ、リンスインシャンプー、掛布団カバー、シーツ、枕カバー、浴衣、ハンドタオル、バスタオル、ハンガー、靴ベラ、洋服ブラシ
- 駐車場は無料でご利用いただけます。どのスペースに停めていただいても結構です。

12/4（金）にチェックイン予定の皆様へ

- チェックインは各自 をお願いします。正門を入れて右側の道を進み、職員用駐車場を過ぎると、共通棟東端のオートロック式扉が見えます。ここをロックし、管理人に到着をお知らせ下さい。管理人が館内を巡回中の際には、管理人室カウンターに連絡先携帯電話番号が掲示してありますので、そちらにお電話をおかけ下さい。
- 管理人からカードキーおよび鍵をお受取り下さい。

12/5（土）にチェックイン予定の皆様へ

- 15:40 以前に総研大に到着される方へは、共通棟 1F の大会受付にてカードキーおよび鍵をお渡し致します。受け取っていただいた時点からすぐにお部屋をご利用になれます。ただし前泊者との関係で、209号室ご利用の方へはカードキーおよび鍵をお渡しできるのが15時以降となります。あらかじめご了承ください。
- 15:40 以降に総研大に到着される方については、チェックインは各自でお願いします。正門を入れて右側の道を進み、職員用駐車場を過ぎると、共通棟東端のオートロック式扉が見えます。ここをノックし、管理人に到着をお知らせ下さい。管理人が館内を巡回中の際には、管理人室カウンターに連絡先携帯電話番号が掲示してありますので、そちらにお電話をおかけ下さい。